

日本多読学会紀要

JERA Bulletin

March 2019 第12巻

【目次】

巻頭言

- p.1 日本多読学会紀要第12巻刊行に寄せて (竹田 恒美)

特別寄稿

- p.3 多読・多聴の学習習慣形成を意図したラジオ番組
—NHK ラジオ「エンジョイ・シンプル・イングリッシュ」制作の舞台裏—
(高山 芳樹)

研究論文

- p.15 英文読解速度の伸長と英語の読み方の関係に関する研究
(藤井 数馬)

学会・セミナー報告

- p.35 2018年度 日本多読学会年会
p.39 2017年度 第11回 関西多読指導者セミナー
p.43 2018年度 日本多読学会主催 第6回九州多読教育セミナー&WS
p.46 2018年度 児童英語部会 初夏のセミナー 及び 秋のセミナー
p.50 日本多読学会会則
p.53 日本多読学会役員名簿
p.54 「日本多読学会紀要」投稿規定

日本多読学会

Japan Extensive Reading Association

日本多読学会紀要第12巻刊行に寄せて

日本多読学会の第12巻紀要をお届けします。

本年度の紀要では、2018年夏に行われた年会特別講演の高山芳樹氏（東京学芸大学）による講演を基にした特別寄稿を最初に掲載しています。高山氏は、「簡単な英語で書かれた英文を読んだり、聴いたりしてそのストーリーを味わうだけの番組」というコンセプトでNHKラジオの英語番組を企画され、番組は2014年の開始以来好評を博して今日に至っています。

講演では「ヨーロッパ言語共通参照枠」（いわゆるCEFR）に基づいたレベル設定から始まり、基本語彙リストの作成、毎回の英文の長さの調整、難易度の高い語彙の提示方法の検討、出来上がった英文の推敲など、番組で使われる英文テキストが出来上がるまでの一連のプロセスが紹介されました。通常は既に完成された状態で本を手にするの多い私たち多読指導者にとっても、テキストが出来上がるまでの様々な苦労や試行錯誤に満ちた舞台裏のお話は興味の尽きないものでした。

研究論文では、英文読解速度を高めた学習者はどのように英語を読み、どのような意識で多読を行なっているか、という問題関心に導かれた調査研究結果が報告されています。この研究は、著者による先行研究の補完研究という位置づけで、それらを合わせた研究結果として、シラバス設計に関する指針と、学習者への個別指導に関わる指針の二つが提案されています。

本紀要は一年間の学会活動の記録でもあります。夏の年会では、「多読図書・洋書祭り」の開催のほか、全部で15件の実践報告と研究発表が行われました。また、東京、大阪、福岡で行われたセミナーでは、都合33件の発表がありました。それぞれ簡潔に報告がまとめられていますので、読者諸氏の日常の多読指導へのヒントとしていただければ幸いです。

日本多読学会紀要の投稿原稿には全部で9つのカテゴリーがあります。研究論文、実践報告、研究ノート、私の多読指導、書評、多読用図書紹介、アイデア、研究会等の報告、その他、です。「教室でこのやり方を試してみたら、意外と好評だった。」「この本は是非多くの人に読んでもらいたい。」など、ちょっとした気付きがあれば、それにふさわしいカテゴリーが用意されています。こうした紀要の構成は、他の学会誌には見られない本学会紀要独自のものです。私たちはこのような投稿原稿の種類における多様性を、本学会の紀要の特徴としてこれからも大切にしていきたいと考えています。会員各位の積極的な発信をお願いいたします。

日本多読学会会長
竹田 恒美

特別寄稿

多読・多聴の学習習慣形成を意図したラジオ番組
—NHKラジオ「エンジョイ・シンプル・イングリッシュ」制作の舞台裏—

高山 芳樹（東京学芸大学）

1. はじめに

第二言語習得研究の知見に基づいて、現在の日本の英語教育・学習の現状を分析した白井（2012）は「インプットの質・量ともに不十分」であることを指摘し、現状を改善し、使える英語を身につけるためには「大量のインプットと少量のアウトプット」が必須であると主張している。近年では、グローバル化の進展やネット環境の普及・充実などにより、日本において英語に触れる機会は十数年前と比較して格段に増えていることは間違いない。とはいえ、日本で英語を学ぶ学習者のほとんどが英語を外国語として学ぶEFL環境に置かれているという状況は不変である。「多読・多聴」（extensive reading and listening）は、このような学習環境の下でも、大量の英語のインプットに触れさせ、十分なインプット理解の機会を与えるための有効な手段と言える。門田・野呂・氏木（2010）は多読に関して、英語のインプット量を増やす以外にも、「読みの流暢さを高める」、「英語を読もうという動機を高める」という効用もあると述べている。

民間の英語教室や小・中・高等学校、高専や大学などで多読指導を試みているという報告を耳にする機会も多くなった。2014年8月発行の雑誌『多聴多読マガジン別冊 英語の多読最前線』（コスモピア）にはそのようなさまざまな教育現場での実践報告の詳細が多数掲載されている。本稿で紹介するNHKラジオ「エンジョイ・シンプル・イングリッシュ」もこの雑誌で取り上げられた英語の多読最前線の1つである。2014年度に放送がスタートし、5年目となる現在、2018年度も番組は継続して放送されている。歴史あるNHKのラジオ英語番組の中でも、番組内で解説を一切つけず、やさしい英語で書かれた英語のストーリーを聞いて味わうだけという異色の番組となっている。筆者はこの番組の初代監修者として、放送開始1年前となる番組立ち上げ作業の時点から、番組内容の検討や、番組と連動する月刊テキストの構成やコンテンツ作成に深く関わったが、この番組はラジオやインターネットというメディアを通して、日本全国で英語を学んでいる多くの学習者の多読・多聴の学習習慣形成に大いに役立っていると自負している。本稿では、このユニークなラジオ英語番組制作の舞台裏を披露しながら、日本における多読・多聴のための学習環境デザインの在り方について考察する。

2. 「エンジョイ・シンプル・イングリッシュ」(ESE)とは？

「エンジョイ・シンプル・イングリッシュ」とは「簡単な英語で書かれた英文を読んだり、聞いたりしてそのストーリーを味わうだけの番組」として、NHKラジオ第2放送で2014年4月より開始された5分間の英語番組である。番組の英語名は*Enjoy Simple English*で、本稿ではこれ以降、略称としてESEを用いる。ESEは月曜日から金曜日までの週5レッスンであり、土曜日にはその週の全5レッスンがまとめて再放送された。

番組では曜日ごとにテーマの異なる英語のショートストーリー（表1参照）の音声の流れ、リスナーはストーリーを聞いて、その内容の面白さを味わうだけである。番組内で語彙・表現・文法事項の解説をしたり、発音練習をしたりすることは一切ない。ストーリーは単純な朗読ではなく、ラジオドラマ風の演出を取り入れ、効果音や役者による振り分けを行うなど、リスナーがストーリーをイメージしやすいように工夫がなされている。

表1 曜日ごとの多彩なテーマ（2014～2018年度）

放送時期	テーマ名	テーマ名の英語表記
2014年度前期	月：オリジナル・ショート・ストーリー 火：先人に学べ！世界の偉人伝 水：子どもでも楽しめる！日本の昔話 木：エンジョイ・ジャパン！ 金：名作をリメイク！連続ストーリー	<i>Short Stories</i> <i>Learning from the Giants</i> <i>Japanese Folklore</i> <i>Enjoy Japan</i> <i>Classics with a Twist</i>
2014年度後期	月：オリジナル・ショート・ストーリー 火：英語で味わう事実談 水：子どもでも楽しめる！日本の昔話 木：世界の魅力を英語で紹介 金：名作をリメイク！連続ストーリー	<i>Short Stories</i> <i>True Stories</i> <i>Japanese Folklore</i> <i>Wonderful Places in the World</i> <i>Classics with a Twist</i>
2015年度前期	月：オリジナル・ショート・ストーリー 火：日本の伝統的笑い！落語 水：東海道～日本の宿場町～ 木：名作をリメイク！連続ストーリー 金：日本の昔話	<i>Short Stories</i> <i>Rakugo</i> <i>Walking the Tokaido</i> <i>Classics with a Twist</i> <i>Japanese Folklore</i>
2015年度後期	2015年度前期の再放送	
2016年度前期	月：オリジナル・ショート・ストーリー 火：ディープな日本へようこそ 水：日本の伝統的笑い！落語 木：世界の昔話・童話 金：名作をリメイク！連続ストーリー	<i>Short Stories</i> <i>Fantastic Places in Japan</i> <i>Rakugo</i> <i>Folklore and Fairytales</i> <i>Classics with a Twist</i>
2016年度後期	2016年度前期の再放送	

2017年度前期	月：私の街 火：世界の昔話 水：日本の伝統的笑い！落語 木：世界の偉人伝 金：英語で味わう江戸川乱歩	<i>My Hometown</i> <i>Folklore and Fairy Tales</i> <i>Rakugo</i> <i>Heroes and Giants</i> <i>Rampo in English</i>
2017年度後期	2017年度前期の再放送	
2018年度前期	月：ニッポンぶらり旅 火：日本の昔話 水：オリジナル・ショート・ストーリー 木：世界の国からこんにちは 金：英語で味わう日本文学	<i>Japan Without a Map</i> <i>Japanese Folklore</i> <i>Short Stories</i> <i>Hello from Around the World</i> <i>Japanese Classics</i>
2018年度後期	2018年度前期の再放送	

ESEには、他の多くのNHKラジオ英語番組と同様に番組用の月刊テキストがある。Graded Readersと同じくらいの大きさで、ページ数は150ページ前後、各曜日のテーマごとにストーリーがまとめて掲載されている。下記の写真は、2014年6月号の火曜日のテーマ「先人に学べ！世界の偉人伝」で、ベートーベンを取り上げたときのテキストの紙面例である。

Tuesday
6/3

Ludwig van Beethoven

Before You Start

38

Today's giant is a German composer who did not give up hope even though he had a hearing problem. His name is Ludwig van Beethoven. The music he wrote is famous all around the world.

39 Tuesday, June 3

3. NHKの英語講座におけるESEのレベル設定

NHKの英語講座は、「ヨーロッパ言語共通参照枠」(Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment)、いわゆるCEFRに基づいたレベル分けをしており、CEFRのA1～C2に、最初歩のA0を加えた7段階のレベル設定となっている。2014年度に番組をスタートさせたESEは、2014～2016年度はA1～A2レベル、2017～2018年度はレベルアップし、A2～B1レベルである。A1レベルはラジオ「基礎英語1」および「基礎英語2」、A2レベルは「基礎英語3」、B1レベルは「ラジオ英会話」のレベルとなっており、ESEは2014～2016年度までは「基礎英語2」と「基礎英語3」の中間ぐらい、2017～2018年度は「基礎英語3」と「ラジオ英会話」の中間ぐらいに位置づけられている。

表2 NHK英語講座におけるESEのレベル (2014～2018年度)

2014～ 2016年度	2017～ 2018年度	CAN-DOディスクリプタ
	B1	社会生活での身近な話題について理解し、自分の意思とその理由を簡単に説明できる。
A2	A2	日常生活での身近なことがらについて、簡単なやりとりができる。
A1		日常生活での基本的な表現を理解し、ごく簡単なやりとりができる。

4. ESE誕生の背景

多読・多聴をコンセプトとする非常にユニークなNHK英語番組を着想したのは、当時NHKエデュケーション語学部チーフ・プロデューサーをしていた鶴川陽一氏(現・語学部専任部長)である。鶴川氏は「リトル・チャロ」、「ニュースで英会話」、「おとなの基礎英語」などの数々のヒット番組に関わり、20年以上、NHKの語学番組制作に携わってきた。鶴川氏は『英語多読法』(古川昭夫著、小学館)を読み、SSS(Start with Simple Stories)の考え方に共感して以来、個人で英語多読を実践していたが、ペーパーバックは高価すぎて、個人には負担大であることを実感したという。そして、誰もが気軽にやさしい英語にたくさん触れられる場をNHKが提供できないだろうかという考えに至り、それがESEの企画につながった。

多読・多聴を習慣化させるために、放送は月～金の毎日、各回放送時間を5分という短いものとし、挫折しにくい形態とした。各曜日のテーマなども企画の段階でほぼ固まっていたが、多読・多聴用の英文の長さや難易度をどのように設定すべきか、英文作成の際に依拠する語彙リストはどのようなものを使用すべきか、など解決すべき課題が多数あり、監修を依頼された筆者は鶴川氏と頻繁に意見交換をしながら、その解決に当たった。

5. ESE内容確定への道のり

5.1 英文のレベル設定をどうするか?

通常が多読であれば、学習者が自身の英語のレベルや興味・関心に応じて自分に適した本を選べばよいわけだが、ESEは「放送」という特性上、学習者を特定のレベルに限定できないため、ESEが多読・多聴用に提供する英文のレベルをどのあたりに設定するかは難しい問題であった。学習者のレベルを超えた素材を選んでしまうと「多読」ではなく、「精読」になってしまうため、できるだけ多くの学習者にとって、英文で使用される語彙・表現が目で見えて、また、音で聞いて理解できるものとなるようにする必要があった。その上、多読・多聴の習慣形成に役立つ英文を提供するためには、内容がそれなりに面白く、継続して読みたい・聞きたいと思えるようなストーリーを多数用意することが必要となる。そのようなストーリーをNHKの英語講座のレベル設定の最初歩に位置するA0レベル（ごく簡単な表現を聞きとれて、基本的な語句で自分の名前や気持ちを伝えられるレベル）で書き、提供し続けることは非常に困難であると判断し、最終的に「中学レベルから逸脱しない難易度の英文」が提供できるCEFRのA1～A2レベルに落ち着いた。レベル設定の検討過程では、中学校の文部科学省検定教科書に掲載されているReading教材（学校図書発行の検定教科書*Total English 2*の“Red Demon and Blue Demon”, *Total English 3*の“Fly Away Home”など）も参考にし、中学レベルの英語であっても、ある程度の読み応えのあるストーリーを提供することは可能であると判断した。また、ESEを主に利用する学習者の多くは中学レベルの英文法の基礎的事項はすでに学んでいるとの前提に立って、英文の難易度調整作業を行うこととした。

5.2 英文作成の際の基本語彙リストをどうするか？

番組タイトルの「エンジョイ・シンプル・イングリッシュ」が示すように、ESEを使って多読・多聴を楽しんでもらうためには提供する英文を極力「シンプル」なものにすることが不可欠である。使用予定の英文素材の中にESE利用者の英文レベルを超えた難しい語彙が含まれており、文脈による語彙の意味の推測なども容易でない場合には書き換えが必要となる。書き換えの際に依拠する基本語彙リストの選定が、監修者である筆者に課せられた大きな宿題の一つであった。

当初はJACET（大学英語教育学会）の当時の基本語リストJACET8000のレベル1まで（1000語）あるいはレベル2まで（2000語）を候補としたが、JACET8000のコーパスが若干古いデータによると思われることや、JACET8000が基準にしているBNCコーパスのようなネイティブ・スピーカーの言語使用の実態を反映させたデータベースよりも、日本人英語学習者にとってよりなじみのある基本英語に限定したデータベースがよいのではと考え直した。最終的には、筆者作成の「中学校の英語検定教科書に共通して現れる基本英単語リスト」をESEの基本語彙リストとして使用することとした。この語彙リストは筆者が平成23～25年度に科学研究費補助金学術研究助成基金助成金を得て行った挑戦的萌芽研究『通じる英語』の発音指導を視野に入れた英語表現リズムパターン・データベースの構築（課題番号23652131）において作成した語彙リストの一部で、当時発行されていた中学校の英語の検定教科書（全6社）のうち、3社以上共通の1245語からなる語彙リストである。この語彙リストをESEの英文作成の際に依拠する語彙リストとして常時利用することとした。

先に述べたように、中学で学ぶ基礎英文法は既習との前提で、中学校の検定教科書に見られるようなシンプルな英語表現が集まった文章をESE用に作成することを基本方針とした。

表3 ESE英文作成の際に使用した基本語彙リストの一部

新中学校教科書3社以上共通1245語

単語数	社共通	単語	品詞	単語数	社共通	単語	品詞	単語数	社共通	単語	品詞
1	6	a	冠	51	3	appear	動	101	6	best	形
2	5	able	形	52	5	apple	名	102	6	better	形
3	6	about	前	53	6	April	名	103	6	between	前
4	3	above	前	54	3	architect	名	104	3	bicycle	名
5	5	abroad	副	55	6	are	動	105	6	big	形
6	5	across	前	56	4	area	名	106	6	bike	名
7	4	act	動	57	5	arm	名	107	6	bird	名
8	3	action	名	58	3	army	名	108	6	birthday	名
9	3	active	形	59	6	around	副	109	6	black	形
10	3	actor	名	60	3	arrest	動	110	4	blossom	名
11	5	actually	副	61	6	arrive	動	111	6	blue	形

5.3 1日5分間の多読・多聴用の英文の長さをどうするか？

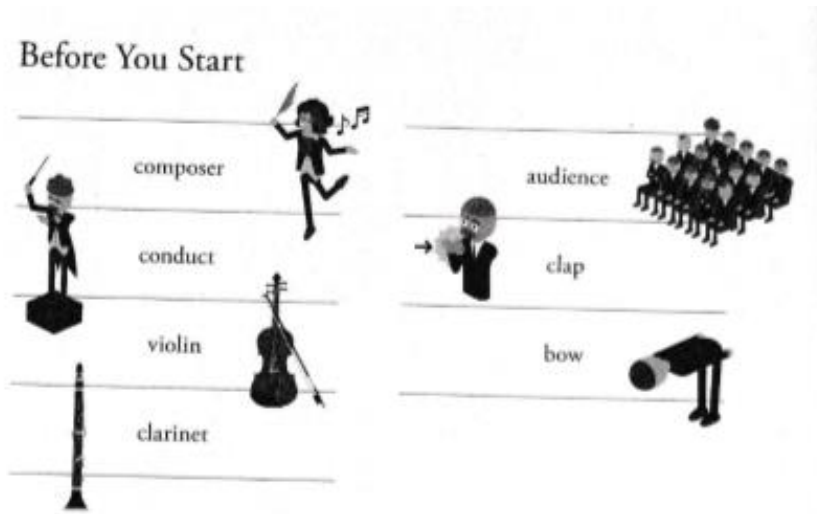
ESEは5分間のラジオ番組であり、金曜日の連続ストーリー（3か月12回で完結）を除いて、原則この時間内に一話完結のショートストーリーを収める必要があった。5分間と言っても、番組のオープニングとエンディング用の音楽や、番組をナビゲートする女優の日本語による今日のストーリーの導入の時間も含まれるので、ショートストーリーの部分は正味4分前後となる。5.1で言及した中学校2年生の検定教科書のReading教材“Red Demon and Blue Demon”は総語数が283語、中学3年生の“Fly Away Home”は558語であり、中学校レベルのシンプルな英語のストーリーでも分量が500語を越えてくると、A1～A2レベルの学習者は「読書の持久力」(reading stamina)が切れて、ストレスを感じてくるのではないかと推察された。また、中学校の検定教科書の朗読音声のスピードは120wpm程度であり、4分間だと480語程度になることから、ESEの英文の長さは500語程度を基本とすることとした。

5.4 難易度の高い語彙の提示の仕方をどうするか？

ESEでは多読・多聴用に提供する英文をシンプルにするために、上記のESE用語彙リストを常時活用しながら、十分易しくなるまで英文の書き換えを何度も何度も行う。しかしながら、ストーリーの内容によっては、どうしても学習者のレベルを超えた語彙が多数出現し、無理にパラフレーズなどをせずに、その語彙をストーリーの中でそのまま使いたい場合も出てくる。例えば、2014年6月号の火曜日のテーマ「先人に学べ！世界の偉人伝」ではベートーベンの生涯を伝えるストーリーを取り上げたが、ESE用語彙リストには出てこないcomposer（作曲家）、conduct（指揮をする）、audience（聴衆）などは書き換えずにそのまま使用した。

このような英文中に出現するESE利用者にとって難易度が高いと考えられる語彙をどう

扱うかも、番組開始前に解決しておくべき課題であった。英文を読ませる前に、語彙とその日本語訳をリスト形式で与えたり、学習英英辞典のように語彙の定義を易しい英語で提示しておくとか、英文中に出てくる語彙に日本語訳のルビをふる、などのアイディアもあったが、日本語訳をできるだけ意識させることなく、英語のストーリー内容を自然に味わわせたいという理由で採用しなかった。ただ、難易度の高い語彙についてまったく何の手当もしないままだと、読みの途中で学習者がいちいち辞書を引いて語義を調べてしまう可能性があるなど、ストーリーの自然な読み取りに支障をきたす場合もある。そこで、Graded ReadersのFoundations Reading Libraryシリーズ（Cengage Learning）での語彙の扱い方を参考にした。このシリーズではBefore You Readというセクションをストーリーの直前ページに設け、ストーリーに出てくるいくつかの語彙の意味をイラストで表している。ESEの月刊テキストにおいてもBefore You Startというセクション名で、語彙とその意味を表す簡単なイラストをストーリーが始まる直前のページに掲載した。下記はペーターベンのストーリーを読ませる前に提示した語彙のイラストの例である。



Before You Startのほかに、テキスト巻末にその月のストーリーに出てきた難しい表現と日本語の意味を一覧にしたWord Listを掲載した。英語の「お勉強」ではなく、多読・多聴を楽しく経験させるという意味ではこのようなWord Listは不要であろうが、NHK語学テキスト使用者側に非常に強いニーズがあるため、是非とも掲載したいという出版社側からの強い要望があり、それに応えることとした。

5.5 英文の作成や表現チェックをどうするか？

NHKの語学番組であるESEが想定する英語学習者のほとんどは、EFL環境にある日本の学校等で学んだり、社会に出てから英語の学び直しをしたりしている人たちであり、日本文化に関する背景知識を共有している人たちである。想定する学習者にとって最適なストーリーとなるよう、英文を何度も修正していく作業を効率よく進めるためには、日本文化に

関する背景知識もある程度有し、かつ、多読・多聴という学び方を熟知している英語のネイティブ・スピーカーの存在が欠かせない。そこで、筆者の知人であった開成学園専任教諭のDaniel Stewart氏に声をかけ、ESEの英文監修を依頼することとした。氏は日本の滞在期間も長く、日本人的ものの見方・考え方や日本の英語教育現場の実態も熟知している。勤務校でも長年の多読指導実績もあり、全国語学教育学会（JALT）で多読研究部会を設立し、国際多読教育学会（Extensive Reading Foundation）の理事も務めるなど、多読指導のスペシャリストである。

学習者が自らの興味・関心に応じて、本のレベル・種類・ジャンルを自由に選べる通常が多読と異なり、ESEはある意味、読みの対象となる英文素材を学習者側に一方的に提供することとなる。もちろんESEの利用者も、提供された月曜から金曜までのテーマの異なるストーリーのうち、自分の興味・関心に合うものだけを選んで多読すればよいのだが、英文を提供するこちら側としては、日本全国の多くの英語学習者にできるだけ多くのストーリーを毎日楽しく読んだり聞いたりして、多読・多聴の学習習慣を継続してほしいと考えた。提供するストーリーの内容自体が面白いものでなければ、たとえそれが利用者の母語である日本語で書かれていた場合でも誰も読んでくれないだろう。そこで、ESEのいくつかのテーマのストーリーの原作として、ふだんから数々の舞台の脚本や演出を手掛けているプロの日本人作家にいつも通りに日本語で面白いオリジナルストーリーを書いてもらい、それをESEの制作チームが時間をかけて英語に直していくという手順をとった。ESEで使用する毎月の英語のストーリーの数は全部で20本であり、それぞれの英文を確定するまでには、チーフ・プロデューサーの鶴川氏と番組ディレクター、監修者である筆者とStewart氏、さらに、NHK出版のESEのテキスト編集者も加わり、毎月何度も長時間に及ぶ会議やメールでのやり取りをこのチーム内で重ねた。1文が長すぎる、文構造が複雑すぎる、難しい語彙・表現の書き換えが十分でない、などの問題を1つ1つ丁寧にクリアしていき、1つのストーリーの英文を確定するまでに1時間以上も議論することはけっして珍しくなかった。

6. ESE放送開始後の反響とその後

これまでに述べてきたさまざまな作業工程・議論を経て、ESEは2014年4月からNHKのラジオ英語番組の一つとしてデビューし、それに伴い、書店にはESEのテキストが毎月並ぶこととなった。正直言って、番組開始時は英語の多読・多聴学習に焦点を当てたこの異色のラジオ番組が、果たして世間の英語学習者に迎え入れてもらえるのか、非常に不安であった。しかし、番組が開始されてすぐに、「易しい英語で書かれているので、ストーリー内容に集中して楽しめる」、「曜日ごとにテーマの異なる興味深いストーリーを味わうことができる」、「ラジオから流れるストーリーが効果音をふんだんに使ったドラマ仕立てとなっており、聴いていて楽しい」、「英語の授業のウォームアップなどで中学校や高校の生徒に聞かせるのに適している」といった非常に好意的なコメントをたくさん頂戴した。ラジオ番組に関する新聞の投書欄でも、番組に対するお褒めの言葉を何度かいただいた。

ESEの放送開始以来、すでに4年半以上の月日が経過したが、筆者にとって何よりもう

れしいのは、4年半以上経った現在も、多読・多聴のためのラジオ番組というこの極めてユニークな英語番組の放送が続いていることである。日本人英語学習者にとって易しい英文となるように多くの時間をかけて書き直しをしてきた英文ストーリーの数も順調に増え、現在ではテーマごとのストーリーをまとめて単行本化したNHK CD BOOK Enjoy Simple English Readersが多数刊行されている（下記写真参照）。



NHKの語学番組のリスナーの中には英語学習意欲が非常に高い人が多く、ESEの英文ストーリーを味わったのちに、音読やシャドーイング練習の素材として活用する人も少なくないようである。500語前後もの分量のある英文であるが、できるだけ自然な英語表現を保ったまま、多くの学習者にとって易しい英文となるように、難易度を調整し、ストーリーの内容自体も興味深く思ってもらえるものを精選したので、ESEの英文は英語運用能力を伸ばすための栄養素を吸収しやすい英語学習素材として、多くの英語学習者の自己学習や中高大などの英語授業でも活用してもらっている。

また、長文でありながらも、中高生でも認知的負荷をあまりかけずに読んだり、聞いたりすることができるさまざまなテーマの英文ストーリーを提供していることから、高校や

大学の入学試験問題の素材としてESEが活用されることも少なくない。

7. おわりに

日本人英語学習者の英語のリーディング力・リスニング力を向上させる試みは至るところでなされてきたが、いまだにその主流は、それほど分量の多くない英文（少ない量）を、時間をかけて（遅い処理）、じっくりと正確に（精密な処理）読んだり、聞いたりするアプローチである。もちろん、このようなアプローチも英語によるコミュニケーション能力を育てる上で非常に重要である。しかし、このような学習過程だけを経て得られるリーディング力・リスニング力で、現代の高度情報化社会で要求される情報処理に迅速・的確に対応し、乗り切っていくことは容易ではない。多量に氾濫する英語記載の情報の中に置かれても、要点や概要をすばやく、かつ、的確にとらえて読んだり、聞いたりする力は不可欠である。このような力の養成に極めて有効なのが多読であり、多聴である。インターネット等の普及により、英語による情報にはいつでもどこでも多量に触れることはすでになっているが、EFL環境にある日本で学ぶ英語学習者にとって、英語の習得に役立つ「理解可能なインプット」を多量に、かつ、継続的に浴びる機会はいまだに十分だとは言えない。ESEはこのような状況を打破し、日本人英語学習者に多読・多聴の学習習慣を形成するための学習環境をデザインする過程で生まれ、進化してきた。正確さと流暢さを兼ね備えたバランスの良い英語のリーディング力・リスニング力を、学習者が歯を食いしばって身につけていくのではなく、ゆったりとした気持ちで、楽しみながら継続的に育てていけるサステナブルな学習環境、それこそが、ESEがいままでも、そしてこれからもこだわっていききたい学習環境である。

注

本稿は2018年8月5日に東京工業高等専門学校で開催された「日本多読学会年会」で、特別招待講演者として筆者が講演した内容に基づいて、加筆したものである。

参考文献

- 門田修平（2014）.『英語上達 12 のポイント』東京：コスモピア
- 門田修平・野呂忠司・氏木道人（編著）（2010）.『英語リーディング指導ハンドブック』東京：大修館書店
- 繁村一義・酒井邦秀（2018）.『英語多読 すべての悩みは量が解決する』東京：アルク
- 白井恭弘（2012）.『英語教師のための第二言語習得論入門』東京：大修館書店
- 高瀬敦子（2010）.『英語多読・多聴指導マニュアル』東京：大修館書店
- 高山芳樹（1995）.「リーディングの学習と指導」金谷憲（編著）『英語リーディング論』東京：河源社 pp.76-119.

大学英語教育学会（JACET）基本語改訂委員会（編）（2003）.『JACET8000』東京：大学英語教育学会

大学英語教育学会（JACET）基本語改訂委員会（編）（2004）.『大学英語教育学会基本語リスト活用事例集：教育と研究への応用』東京：大学英語教育学会

古川昭夫（2010）.『英語多読法』東京：小学館

研究論文

英文読解速度の伸長と英語の読み方の関係に関する研究

**A Study on the Relationship
between the Development of Reading Rates and the Quality of Learners' English Reading**

藤井数馬 FUJII Kazuma (長岡技術科学大学)

Abstract

This paper aims to explore the relationship between the development of reading rates and the quality of learners' English reading. Based on his previous two empirical studies, the author suggested that learners at A1 level on CEFR can increase their reading rates significantly if they read a total of 50,000 words of easy English in one semester (five months). However, issues concerning how learners who demonstrated a significant increase of reading rates read English have not been explored. This paper follows the research of the previous two studies, and addresses the influence of reading methods on the development of reading rates. In this study, the results of a survey which contained 22 questions about reading method, the choice of English reading books and the learners' awareness toward the ER (extensive reading) program were examined. The results of factor analysis suggested the following two points as an influence on the increase in reading rates: (1) learners who significantly increased their reading rates chose a book that was easy and suited to their level, and read rapidly with room to be conscious of word and expression usage in a book; (2) they read extensively, recognizing that ER is effective in improving their English ability.

Keywords: extensive reading, reading rates, reading attitude

要旨

本稿は、筆者による二件の先行研究を基にした補完研究である。これら二件の先行研究は、高専2年生を対象に週に1回約30分の授業内多読を5ヵ月間定期的に行うことで、英文読解速度の向上に与える影響について探究したものである。これらの研究結果から、CEFRのA1レベルの学習者が5ヵ月間で50,000語程度の英語を読むことで、多読を行わない場合と比べて、意味理解を伴った読解速度が有意に上昇する可能性が示唆された。しかし、これらの研究では、英文をどのように読めば読解速度が高まるのか、すなわち英文読解速度の伸長と英語の読み方の関係については探究ができていなかった。そこで本研究では、

英語の読み方や多読に対する意識に関して質問紙調査を行い、因子分析を用いて結果を分析、考察した。本研究の結果、英文読解速度を大きく高めた学習者は、本の中の語や表現を使用することを意識しながら読んでいる可能性と、多読が英語力の様々な側面の向上に効果的であるという認識を持ちながら取り組んでいる可能性が示唆された。

1. はじめに

外国語習得のためには目標言語の大量のインプットが必要であることは論を俟たない (e.g., 白井, 2008; 田中, 2017) が、日本のようなEFL (English as a Foreign Language) 環境において不足してしまう英語のインプットを適切に補うことは決して容易ではない。それは、どのようなインプットを、どれだけたくさん、どのように与えるのかということ—換言すれば、インプットの量と質の問題—を考えなければならないからである。

現在、理解可能なインプットを大量に与えられるという点で、多読の意義が論じられている (e.g., Krashen, 1985, 2004; Nation, 1997, 2013)。多読自体は特段新しい概念や学習方法ではない (Day & Bamford, 1998) が、日本の英語教育に多読が浸透する大きな契機となったのは、酒井 (2002) による多読三原則の提唱と、多読目標としての100万語の提示だろう (Nishizawa, Yoshioka, & Ichikawa, 2017)。多読三原則により、多くの英語を読むための指針が明瞭簡潔に、且つ気軽に取り組めるかたちで示されたことで、多くの学習者を取り込むことに成功し、多読は日本で年々広がりを見せている (高瀬, 2010)。また、100万語を多読の目標値として掲げたことにより、GR (Graded Readers) のページ数や冊数で読んだ分量を測ることが多かった海外の多読実践事例とは異なり、日本の多読実践では読語数で読んだ分量を測ることが一般的になっている。さらに、多読図書の語彙レベル、文法レベルだけでなく、挿絵の有無や総語数やフォントの大きさなども含んで算出する、日本人英語学習者にとっての読みやすさを示した主観的なリーダビリティ指標であるYL (読みやすさレベル) の開発 (古川, 2010) は、GRに加え、LR (Leveled Readers) や児童書などを組み合わせながら多読を進めることを可能にした。これにより、GRの一番下のレベルを流暢に読むことが難しい学習者であっても、より易しいOxford Reading Treeシリーズなどから多読を始めることができるようになり、多読の入り口を大きく広げることに繋がった。加えて、指導者向けの実践書の刊行 (e.g., Bamford & Day, 2004; 高瀬, 2010) や、日本各地で行われている多読指導者セミナーなどが、教育機関での多読指導を広げている。

このような多読実践の広がりとともに、多読による学習効果に関する実証研究も蓄積を増している。例えば、英文読解速度の向上 (Beglar, Hunt, & Kite, 2012; Fujita & Noro, 2009)、情意面や動機づけの改善 (西澤・吉岡・伊藤, 2007; Takase, 2012)、語彙力の向上 (Pitts, White & Krashen, 1989)、英語運用能力試験におけるスコア向上 (古川, 2010; Nishizawa, Yoshioka, & Fukada, 2010) などが報告されている。これら先行研究は、インプット不足が問題となるEFL環境において多読は有効な手段であることを示唆するものであり、多読を英語指導に組み込むことに目を向けさせるものである。

2. 研究の背景

多読指導という枠組みから先行研究を俯瞰した場合、今後研究を進めなければならない領域も見出すことができる。その方向性は大別して二つあり、一つはシラバス設計に関する方向性であり、もう一つはカリキュラム設計に関する方向性である。いずれも、「多読をどのように、どの程度組み込むのか」という問いが論点となる。この問いに対して示唆を得ることが重要なのは、英語指導全体の中に多読を有効に組み込むための指針を得ることに繋がるからである。

シラバス設計に関する論点は、「どの程度の英語運用力を持った学習者が、どれだけの分量を、どのように読めば、どの側面の英語力の向上に多読が有効に機能するのか」に対する探究と直結する。すなわち、多読指導を組み込んだシラバスを設計する際には、学習者の英語運用力や学習経験や授業期間などの実態を勘案した上で、現実的な到達目標を設定し、そこに到達するために、どれだけの分量を、どのように読ませるのかを検討した上で行う必要があり、その設計に対して知見を与える研究が求められることになる。

後者のカリキュラム設計に関する論点は、Nishizawa et al. (2010, p. 638) が、“Short-term ER [Extensive Reading] programs do not seem to demonstrate the effectiveness of ER to students”と述べているように、多読は長期継続的に行われることで効果が現出する傾向がある性質と深く関わるものである。すなわち、長期継続的に多読指導を行うのであれば、その期間に多読以外の指導要因、学習要因が混在することは避けられない。この現実的な側面があるならば、シラバス設計よりも一段高い英語指導全体の視点から、どのくらいの割合を多読に充てるのが効果的か、多読の他にどのような指導や活動を組み合わせるべきなのか、そのために何時間の指導が必要かなどに関して探究する必要がある。勿論、この論点は、多読が英語運用能力向上に対してどの程度の学習効果をもたらすと考えるのか、というスタンスと関連して深めていかなければならない。すなわち、多読のみ、あるいは多読中心の指導で、全て、あるいはほぼ全ての英語能力の向上が期待できるという立場(e.g., Krashen, 2004) もあれば、多読指導のみ、あるいはインプットのみで全ての英語能力の向上を期待することは難しく、多読指導に加えて何らかの指導を組み込むことが必要だとする立場(e.g., 金谷, 2005; 村野井, 2006; 竹内, 2007; 田中, 2011) もあるからである(Fujii, 2017)。つまり、カリキュラム設計において、英語学習全体の中で多読をどの程度組み込むのか、多読に加えて何を指導するのかという問いに対する指針は、これら二つの立場によって異なることになる。

シラバス設計に関する論点とカリキュラム設計に関する論点の差異は、視点の高低に拠るものであり、相補的に研究を進めるべき領域である。先行研究や今後の実証研究や指導実践からの知見を基に、カリキュラムやシラバス設計のための指針を提示し、各指導者の経験、学習者の状況などを含めながら、各現場に合った多読指導のプログラムを構築していく必要があるだろう。

以上の議論を別の観点から論ずるならば、効果的な多読指導を行うためには、指導者にとっては多読三原則だけでは不十分であるということである⁽¹⁾。多読三原則は、学習者にとっては多くの英語を長期的に読むための、そして100万語多読をするための明瞭な指針と

なるが、指導者にはもう少し細かい指導指針が必要であると考えられる。英語運用力、英語学習経験、動機づけなどが一人ひとり異なる学習者が、限られた授業時間の中で学ぶ教育現場で多読を取り入れる際には、各教育現場あるいは各個人に視点を置いた、きめの細かい指導が求められるからである。確かに、多読において最も重要な指導が大量に読ませることであることは言うまでもないが、一方で読語数のみが押し並べて全ての学習者に高い英語運用能力を担保する唯一の条件ではないことは、これまでの研究が明らかにしていることである。最近では、英語の読み方の質や多読記録帳への記録方法の重要性も指摘されている (e.g., 魚住・高瀬, 2016) が、このような多読の質に着目した研究は今後進めるべき重要な領域であると考えられる。また、多読の効果が継続的に報告されているのは同一の教育機関からであることが多い (e.g., 古川, 2010; Nishizawa, et al., 2010, 2017) ことを考えると、多読指導を有効にするための適切なカリキュラム論、シラバス論に加え、指導者がどのように学習者に寄り添い、導いているのかという指導者論への探究も求められるだろう。

本研究は、以上の問題意識に基づき行われた藤井 (2017) (以下、「先行研究 1」) および藤井 (in press) (以下、「先行研究 2」) の補完研究となるものである⁽²⁾。これら二件の先行研究は、授業内多読指導で英文読解速度がどのように伸長するのか、そしてその伸長度は英語運用力や期間内読語数とどのような相関があるのかに関して実証的に研究したものであり、多読指導のシラバス設計に知見を与えることを目的としたものである。具体的には、高等専門学校 2 年生 (CEFR の A1 レベル、一部は A2 レベル) を対象に、約 5 ヶ月間 (15 授業週間)、週 1 回 30 分程度の授業内多読を行い、期間中に三回の英文読解速度調査 (以下、「速読調査」) を行うことで、読解速度の伸長を調査、分析したのが先行研究 1 である。続く先行研究 2 では、先行研究 1 とは異なる高専 2 年生を対象にすることで対照群を設定し、多読をしない時期に先行研究 1 と同じ速読調査を行い、結果を先行研究 1 のものと比較することで、授業内多読が速読力向上に与える影響に関して、より精緻に分析、考察を行った。

これら二件の研究の結果、CEFR の A1 レベルの学習者が、5 ヶ月間で 5 万語程度を読むことで、多読を行わない学習者よりも意味理解を伴った読解速度を有意に高めることができる可能性、そして A2 レベルなど英語運用力が比較的高い学習者であれば、多読による読解速度向上の効果はより早い段階で現出する可能性が示唆された。これらの研究により、A1 レベルの学習者を対象に多読を取り入れて速読力を向上させたい場合、半期間 (5 ヶ月) で 5 万語を読ませるシラバスを設計するという指針を得ることはできたが、限界点の一つは、学習者の英語の読み方の質と読解速度向上の関係について紙幅の都合で分析、考察ができていなかったことである。5 ヶ月で 5 万語というのは平均値を主に利用した統計分析結果による量的観点からの示唆である。しかし、質的な観点からも、すなわち学習者の英語の読み方や選書の仕方や多読に対する意識と、読解速度向上結果の間に関連性があるかどうかについても調査を進めるべきであろう。なぜなら、もし両者に何らかの相関関係が見られるのであれば、多読図書や英語の読み方に関する具体的できめの細かい指導に繋がる教育的示唆となるからである。

そこで本稿では、先行研究1の学習者を対象に多読授業の終盤で実施した、多読の際の英語の読み方、選書の仕方、多読に対する意識に関する質問紙調査の結果に対して、探索的因子分析を用いて因子を特定し、先行研究1の参加者を読解速度向上の度合いに応じて三群（上昇群、標準群、下降群）に分け、三群間で因子得点に有意な差が見られるかどうかを分析、考察する。

本研究は先行研究1および先行研究2を補完する位置づけのものであるため、これら研究の要点を概説する必要がある。そこで、まず次節で先行研究二件の概説を行う。第4節以降では、質問紙調査と因子分析結果を提示し、その結果に基づき考察を行い、教育的示唆を提示する。

3. 先行研究の概説

3.1 先行研究1の概説

先行研究1では、A高等専門学校（以下、「A校」）の2年生118名を研究参加者として、週に1回30分程度の定期的な授業内多読を15回程度、A校の図書館で実施した。研究期間は平成27年9月～平成28年2月までの後期授業開講期間の5ヵ月（15授業週）であり、期間内での平均読語数は47,609 (*Max* 165,033、*Min* 17,375、*SD* 22,281)、平均読冊数は46.3 (*Max* 151、*Min* 15、*SD* 21.6)であった。参加者が1年次の11月に受験したTOEIC Bridge[®] IPテストの平均スコアは125.2点であり、中心層はCEFRでA1レベルにいる学習者である（国際ビジネスコミュニケーション協会, 2018）。多読の取り組み状況としては、Graded Readersの一番下のレベルなど、YL 1.0前後の難易度の多読図書を中心に読んだ学生が多かった。また、授業外での自主的な多読も強く推奨されたが、長期休暇を除き義務化はされず学習者に委ねられ、定期的に授業外でも読む習慣を身につけた学生は一部に限られた。研究期間となった後期の当該授業科目は90分授業が週に2コマあり、多読以外の英語指導としては、検定教科書を用いて主に精読を中心とした指導を行った。

本研究参加者に対し、多読指導開始時（9月）、中間時（12月）、終了時（翌2月）の三回、速読調査を行うことで、多読指導による読解速度の変遷を調査した。調査使用英文は、参加者の英語習得状況を考慮し、Nation and Malarcher（2007）の中から300語程度の異なる英文三種類を選出した。300語程度とした理由は、参加者が普段読んでいた一冊の多読図書の分量から判断して無理がなく、多読の影響による速読力調査に使用するのに適切であると考えたためである。三種類の英文難易度は、Lexile[®]とFlesch Reading Ease（以下、「FRE」）およびFlesch Kincaid Grade Level（以下、「FKGL」）で測定し、ほぼ同程度のリーダビリティであることを確認した。英文内で使用されている語彙レベルは、Aoyama Gakuin University Word Level Checkerを利用し、JACET8000を使用辞書として調べ、中学学習語彙とされる1,000語レベルがトークンで90%以上を占め、高校初級にあたる2,000語レベルまで含めればいずれもトークンで96%以上を占めている英文であることを確認した。以上の英文難易度および語彙レベルから、高専2年生に対する速読調査用英文として大きな問題はないと判断した（表1）。また、速読調査の際に字面だけを追って読むいわゆる「滑り読み」にならないように、Nation and Malarcherに付随している内容把握問題5題をそのまま利用し、意

味理解をしながら読ませて読解速度を計測することを試みた。

表1 速読調査使用英文の特徴

実施	語数	Lexile®	FRE	FKGL	1,000語レベル	2,000語レベル
調査1	298	760L	82.9	4.7	91.3%	96.7%
調査2	301	710L	87.8	4.1	96.7%	97.1%
調査3	305	720L	83.1	4.5	93.5%	96.7%

読解時間の計測時には参加者それぞれにストップウォッチを使用させ、読解速度をできる限り正確に測ることを試みた。速読調査の手順としては、まず二つ折りの状態の速読調査用紙とストップウォッチを参加者に配布した。速読調査用紙の表面には本調査の目的と手順、注意事項、および結果データの使用目的が書かれ、英文は二つ折りした内部に印刷されており、教員の合図まで開かないように指示した。次に、合図とともにストップウォッチをスタートさせ英文を読み始めさせ、読み終わった時点でストップウォッチを止めてかかった時間を記入させ、用紙の裏面に印刷されている内容把握問題を、英文を読み返すことなく回答させた。英文を読み返すことなく回答させた理由は、意味を十分に考えずに英文を速く読み、問題に回答する段階で英文をゆっくり参照する読み方を防ぐためである。この三回の調査を、WPM (Words Per Minute) および、WPMを内容把握問題の正答率に応じて (正答率÷問題数) で掛けた「修正WPM」(卯城, 2009) の二つの指標から数値化し、三回の調査結果の差は、一元分散分析 (分散が不均一の場合はKruskal-Wallis順位検定) を用いて検証した。

その結果、参加者全体の平均WPM ($H(2)=52.20, p=.000$) および修正WPM ($H(2)=50.99, p=.000$) いずれの指標においても、測定した三回の数値の間で有意差が見られ、多重比較の結果、WPMについては1回目と2回目、および1回目と3回目の間で有意差が見られ、修正WPMについては1回目と3回目、2回目と3回目の間で有意差が見られた (表2)。

表2 三回の調査におけるWPMおよび修正WPMの平均値

指標	N	調査1	調査2	調査3	有意差
		M (SD)	M (SD)	M (SD)	
WPM	118	95.8 (22.4)	117.8 (31.7)	124.0 (33.5)	3>2>1 ***H
修正WPM	118	77.2 (27.1)	81.0 (33.2)	107.9 (37.6)	3>2=1 ***H

***: $p < .001$

この結果から、A1レベルの学習者を対象にした場合、単純な英文読解速度は多読開始3ヵ月程度 (期間平均読語数27,365、平均読冊数30.1) で高まるが、意味理解を伴った読解速度は多読開始5ヵ月程度 (期間平均読語数47,609、平均読冊数46.3) で高まる可能性が示唆された。

さらに、読解速度の変化を詳細に分析するために、参加者の英語運用力に応じて三群に分け、読解速度の変化を分析した。英語運用力の指標として用いたのは、参加者が1年次の11月に受験したTOEIC Bridge[®] IPテストのスコアであり、スコアが130点以上だった学習者を上位群 ($n=41$)、128点から120点までを中位群 ($n=43$)、118点以下を下位群 ($n=34$) とした。CEFRで上位群はA2レベル、中位群はA1上位レベル、下位群はA1レベルに該当すると考えられる (国際ビジネスコミュニケーション協会, 2018)。英語運用力別の三群における読解速度の記述統計は表3である。WPMにおいて全調査において三群間内で有意差が見られ (調査1: $F(2, 115)=5.66, p=.0005$; 調査2: $F(2, 115)=7.68, p=.0007$; 調査3: $F(2, 115)=5.86, p=.0004$)、多重比較の結果、調査1では上位群と下位群の間のみ有意差が見られたが、調査3では上位群と下位群に加え、上位群と中位群の間でも有意差が見られたことから、上位群と中位群・下位群の差が広がっていることが分かった。修正WPMにおいても、全調査において三群間で有意差が見られ (調査1: $F(2, 115)=12.95, p=.000$; 調査2: $F(2, 115)=12.50, p=.000$; 調査3: $F(2, 115)=8.91, p=.0003$)、上位群および中位群と下位群の間の差が調査を重ねるにつれて広がることが分かった。

表3 英語運用力別三群におけるWPMおよびM-WPM平均値の推移

調査回	指標	上位群($n=41$)	中位群($n=43$)	下位群($n=34$)	有意差
		$M (SD)$	$M (SD)$	$M (SD)$	
調査1	WPM	103.7 (22.4)	95.4 (22.1)	86.9 (19.9)	上>下 *** F
	修正WPM	91.6 (27.0)	74.9 (21.5)	62.7 (25.8)	上>中>下 *** F
調査2	WPM	131.2 (34.7)	115.9 (28.6)	104.1 (25.4)	上>中=下 *** F
	修正WPM	98.7 (36.5)	77.9 (28.3)	64.2 (23.9)	上>中=下 *** F
調査3	WPM	136.5 (36.0)	122.4 (31.1)	111.1 (28.5)	上>中=下 *** F
	修正WPM	123.1 (38.8)	108.8 (34.2)	88.6 (31.8)	上=中>下 *** F

***: $p < .001$

これらの結果から得られた示唆としては、英語運用力が高い学習者は元々英文読解速度が速いだけでなく、多読を取り入れることによって速読力が大きく上昇することが期待されるということ、そして意味理解を伴った英文読解速度においては特に、上中位群と下位群の間で速読力の差が広がる可能性である。

しかしながら、先行研究1の最大の限界点として指摘しておかなければならないことは、対照群が設定できなかったことである。表2、表3で示された結果に対して、多読がどの程度影響を与えたのかについて調査、分析ができず、速読調査を三回行ったことによる練習効果によって数値が上がった可能性も考えられた。そこで、この後続研究として行った先行研究2では、先行研究1の参加者と同じA校に所属する異なる2年生123名を対照群として設定し、多読を行わない前期授業期間を使い、先行研究1と同一の速読調査を同一回数行った。そして、二つの結果を比較することで、5ヵ月間の定期的な授業内多読が英文

読解速度に与える影響について精緻化することにした。

3.2 先行研究2の概説

先行研究2の参加者（以下、「対照群」）は、A校の2年生123名であり、先行研究1における参加者（以下、「処置群」）118名の一学年下の学習者である。どちらの学習者とも1年次の11月にTOEIC Bridge[®] IPを受験したが、処置群の平均点（125.2点）と対照群の平均点（124.6点）の間で有意差は見られなかった（ $t(236)=0.32, p=.750$ ）ことから、両群の学習者は同程度の英語運用力を持つと考えられる。A校における2年次の当該科目では、週に1回しか授業がない前期は検定教科書を用いて精読を中心とした授業を行い、週に2回の授業がある後期には、検定教科書を使った精読を主とした授業に加え、週に1回30分程度の授業内多読を15回程度、図書館で実施している。そこで、対照群の前期の期間を使い、先行研究1で行ったものと同じの速読調査を、4月、6月、9月の三回実施し、その結果を処置群のものと比較した（表4）。対照群と処置群で使用した検定教科書は異なるが、ともに同程度の難易度とされている教科書であり、2年次の授業はともに筆者が担当した。

表4 研究参加者（処置群、対照群）

参加者	n	学年	1年次11月	2年次前期	2年次後期
処置群	118	A校 H27年度2年	TOEIC Bridge [®] IP	検定教科書	検定教科書+週1回多読 速読調査(9, 12, 2月)
対照群	123	A校 H28年度2年	両群間で 有意差なし	検定教科書 速読調査(4, 6, 9月)	検定教科書+週1回多読

対照群の速読調査結果を処置群の結果と合わせた記述統計が表5である。WPMおよび修正WPMいずれも、調査1、調査2の段階では両群間で有意差は見られなかったが、調査3の段階では、WPM（ $t(239)=2.36, p=.019$ ）、修正WPM（ $t(239)=3.80, p=.000$ ）ともに、処置群の読解速度が対照群を有意に上回った。

この結果からの重要な示唆は以下の二点である。すなわち、A1レベルの学習者に対して週1回30分の授業内多読を行うことで、多読を行わない場合と比較して、意味理解を伴った英文読解速度が5ヵ月程度（期間平均読語数47,609）で向上する可能性が一点⁽³⁾。授業内多読開始から3ヵ月程度（期間平均読語数27,365）では、多読を取り入れたことによる読解速度の向上は顕著に現れない可能性がもう一点である。

表5 三回の速読調査におけるWPMおよび修正WPM

調査回	指標	処置群 (n=118)	対照群 (n=123)	有意差
		M (SD)	M (SD)	
調査1	WPM	95.8 (22.4)	99.9 (32.6)	n.s.
	修正WPM	77.2 (27.1)	80.5 (38.6)	n.s.
調査2	WPM	117.8 (31.7)	111.1 (40.0)	n.s.
	修正WPM	81.0 (33.2)	76.7 (38.6)	n.s.
調査3	WPM	124.0 (33.5)	113.1 (37.9)	処>対 * <i>t</i>
	修正WPM	107.9 (37.6)	89.5 (37.6)	処>対 *** <i>t</i>

***: $p < .001$ **: $p < .01$ *: $p < .05$ n.s.: 有意差なし

先行研究1では、英語運用力別に三群に分けて読解速度の変遷を分析したところ、A2レベルなど英語運用力が比較的高い学習者であれば、A1レベルの学習者と比較して多読による速読力の向上が早い段階で表れ、伸長度も大きいことが示唆された(表3)。しかし、ここで生じる一つの疑問は、元々英語運用力の高い学習者は、多読を取り入れなくても精読中心の授業で速読力を高めていけるのではないかという問いである。この問いを探究するために、対照群の学習者を、1年次の11月に受験したTOEIC Bridge[®] IPテストのスコアに応じて、処置群と同様に、130点以上を上位群(n=36)、128点から120点を中位群(n=46)、118点以下を下位群(n=41)として比較した。英語運用力別の三群で、処置群と対照群とを比較した記述統計が表6である。なお、表中の「修正」とは「修正WPM」を表す。

表6 英語運用力別三群における処置群と対照群の比較

調査回	指標	処・上(n=41)	対・上(n=36)	処・中(n=43)	対・中(n=46)	処・下(n=34)	対・下(n=41)
		M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)
調査1	WPM	103.7 (22.4)	113.3 (38.9)	95.4 (22.1)	98.0 (28.9)	86.9 (19.9)	90.4 (26.8)
	修正	91.6 (27.0)	104.3 (43.3)	74.9 (21.5)	75.6 (33.1)	62.7 (25.8)	65.1 (29.8)
調査2	WPM	131.2 (34.7)	120.8 (45.1)	115.9 (28.6)	109.2 (33.6)	104.1 (25.4)	104.9 (41.3)
	修正	98.7 (36.5)	94.1 (44.6)	77.9 (28.3)	71.5 (33.8)	64.2 (23.9)	67.1 (33.4)
調査3	WPM	136.5 (36.0)	120.7 (38.0)	122.4 (31.1)	112.6 (37.7)	111.1 (28.5)	107.1 (37.9)
	修正	123.1 (38.8)	107.6 (37.0)	108.8 (34.2)	86.9 (36.0)	88.6 (31.8)	76.5 (34.5)
上昇値	WPM	32.8 (16.4)	7.4 (-0.9)	27.0 (9.0)	14.6 (8.8)	24.2 (8.6)	16.7 (11.1)
	修正	31.5 (11.8)	3.3 (-6.3)	33.9 (12.7)	11.3 (2.9)	25.9 (6.0)	11.4 (4.7)

対照群の上昇値に着目すると、WPM、修正WPMともに、上位群であれば上昇値も大きいわけではないことが分かる。寧ろ、下位群の方が速読力を高め、上位群との差が調査1から調査3にかけて縮まっている。この結果から、英語運用力が高い学習者は元々英文読解

速度が速いだけでなく、授業内多読を取り入れることで英文読解速度が最も高まるという先行研究1からの示唆は、対照群を設定した先行研究2によって支持されたと言える。また、英語運用力別三群のいずれにおいても処置群の方が対照群よりも上昇値が大きく、授業内多読が読解速度向上に有効であることが示唆された。

4. 英文読解速度の伸長と英語の読み方の関係

前節で概説した二件の先行研究によって明らかになったことは、英語運用力の高低にかかわらず、5ヵ月間の週1回30分程度の授業内多読が、意味理解を伴った読解速度の向上に有用であるということである。また、英語運用力が高い学習者ほど、多読を取り入れたことによる読解速度伸長の効果が早い段階で顕著に現れる可能性があることも分かった。これらの結果から得られた教育的示唆としては、授業内多読を取り入れて速読力の養成に繋げるためには、A1レベルの学習者を対象にした場合、指導者は半期間で少なくとも50,000語の理解可能なインプットを与えるよう授業設計をする必要があるということである。また、A2レベルの学習者や半期間で50,000語以上のペースで多読をする学習者であれば、その効果はより短期間で出る可能性があるということであり、多読指導者がシラバスを設計する際の有用な知見になると考えられる。

二件の研究を通して、期間と語数の観点、すなわち読む時間と量の観点から速読力向上に繋がる閾値を示唆することができたものの、処置群の参加者が英語をどのように読み、本をどのように選び、多読に対してどのような意識を持って取り組んでいたのか、そして英語の読み方や多読に対する意識と速読力向上の間に関連があったのかという観点、すなわち多読の質的な観点からは探究できていなかった。

そこで本研究を、先行研究1および先行研究2の補完研究と位置づけ、以下を研究課題(RQ)に設定し、処置群の参加者に対して多読終了時である平成28年2月(調査3の段階)に実施した質問紙調査の結果を分析することで、このRQを探究したい。

RQ: 英文読解速度を高めた学習者は、どのように英文を読み、どのような意識で多読を行っていたか

4.1 研究参加者および研究方法

本研究の参加者は、先行研究1におけるA校の2年生118名(処置群)のうち、質問紙調査に対して有効な回答を行った113名である。本研究では、参加者の英語の読み方や選書方法や英語多読に対する意識が変数となり、大量のデータ収集が必要となることから、質問紙の使用が適切であると判断し、3回目の速読調査(調査3)を実施した後の授業内(平成28年2月)で実施した。質問項目は、魚住・高瀬(2016)による調査を参照し、英語多読図書を選書方法に関する質問を10項目、英語の読み方や多読に対する意識に関する質問を12項目作成し、それぞれ五件法で尋ねた(付録参照)。

4.2 データ処理

まず、質問紙調査内の質問項目の一つ見られたネガティブ項目である「英語を読む時、

分からないところを飛ばしても気にならない」を、ポジティブ項目に修正を行った。続いて、質問紙の全22項目それぞれの平均値、標準偏差、分散を算出した。この記述統計を、平均値の大きい順に並べて示したのが表7である⁽⁴⁾。なお、表7中の項目番号とは、付録で割り当てている質問番号のことである。

次に、平均値に標準偏差を加えたものがスケールの最高点（5点）を超える項目は天井効果を、平均値から標準偏差を引いたものがスケールの最低点（1点）を下回る項目は床効果を認め、分析から除外する必要があったが、天井効果、床効果が認められる項目は一つもなかったため、全22項目を分析対象とした。

表7を参照することで、学習者の多読図書の選書方法や、英語の読み方や多読に対する意識に関して一定の方向性が見えてくるが、全体的な傾向が捉えにくいので、探索的因子分析（最尤法、プロマックス回転）を用いて項目の背後にある共通因子を探り、より汎用性の高い要因を探ることにした。

表7 質問紙調査結果（平均値、標準偏差、分散）

項目番号	質問項目	平均値	標準偏差	分散
19	速読力向上への寄与	4.054	0.826	0.682
12	推測して読む	3.865	0.780	0.609
9	7割以上の理解	3.804	0.994	0.988
5	好きなシリーズ	3.568	1.157	1.339
18	語彙力向上への寄与	3.518	0.958	0.919
3	多くの語数	3.268	0.995	0.991
20	英作文力向上への寄与	3.268	0.968	0.937
1	好きなジャンル	3.234	1.286	1.654
15	分からないと気になる	3.161	1.111	1.235
21	英会話力向上への寄与	3.152	1.076	1.157
10	流暢に読める	3.027	1.150	1.324
4	多くの冊数	2.955	1.043	1.088
13	繰り返し読む	2.938	1.034	1.068
11	意味を考えず飛ばす	2.839	1.070	1.145
2	様々なジャンル	2.830	1.056	1.115
22	リスニング力向上への寄与	2.768	1.115	1.243
8	様々な語数	2.696	1.047	1.096
16	英単語や表現を覚えようとしている	2.589	1.009	1.019
6	様々なシリーズ	2.545	1.021	1.043
17	多読図書内の表現を使用	2.473	0.977	0.954
7	なるべく短い語数	2.330	0.924	0.854
14	辞書で調べる	2.071	1.011	1.022

因子分析においては、以下の手順で因子数を決定した。まず、固有値1以上を基準として、スクリープロットを利用したところ、固有値の変化は、2.95、0.29、0.42、0.15、0.34、0.07... というものであり、初期解として4因子構造が妥当であると考えられた。そこで4因子を仮定して、最尤法、プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、「意味を考えずに飛ばす」「繰り返し読む」「多くの語数」「分からないと気になる」「好きなシリーズ」「好きなジャンル」の6項目の因子負荷量が0.4に満たなかった。そこで、この6項目を除外し、再び最尤法、プロマックス回転を行った結果、5回の回転で反復が収束し、4因子が抽出された。固有値と減衰状況と解釈可能性からこの4因子解を採用した ($\chi^2=85.88, p=.024$)。

次に、本稿の研究課題を探究するために、処置群の参加者を、速読調査の上昇値に応じて三群に分けることにした。具体的には、調査3の段階のWPM値が調査1の段階のWPM値と比べて落ちた学習者を下降群 ($n=15$) とし、残りの参加者を大まかに二分割し、調査1から調査3にかけてWPM値が27.0以上上昇した学習者を上昇群 ($n=48$)、WPM値が0.1~24.9上昇した学習者を標準群 ($n=50$) とした。修正WPMに関しても同様に、調査3の段階の修正WPM値が調査1の段階の修正WPM値と比べて落ちた学習者を下降群 ($n=21$) とし、残りの参加者を大まかに二分割し、調査1から調査3にかけて修正WPM値が35.0以上上昇した学習者を上昇群 ($n=47$)、修正WPM値が0.1~34.9上昇した学習者を標準群 ($n=45$) とした。そして、因子分析で得られた各因子の因子得点が、読解速度上昇値に応じて分けた三群間で有意差があるかを一元分散分析で検証することで、英語の読み方や多読に対する意識と、速読力上昇の関係を分析することにした。

4.3 結果

最尤法、プロマックス回転による最終的な因子パターンと因子間相関を表8に示す。因子Iは4項目で構成されており、「英会話力向上への寄与」や「リスニング力向上への寄与」など、多読による英語力向上の認識に関わる因子であるため、「効果認識因子」と命名した。

因子IIは5項目で構成されており、「なるべく短い語数」の本を読んだり、「様々なジャンル」や「様々なシリーズ」を読んだりする多読傾向が窺えることから、「多種類多読因子」と命名した。

因子IIIは3項目で構成されており、「多読図書内の表現を使用」しようと心がけていたり、多読図書内の「英単語や表現を覚えようとしている」姿勢や、多読図書を読んだ後には、未知語などを「辞書で調べる」姿勢が窺えたりすることから、「表現意識因子」と命名した。

因子IVは4項目で構成されており、分からない表現を「推測して読む」姿勢や、「7割以上の理解」を得られる本を選んだり、「流暢に読める」本を選んだりする姿勢が窺えることから、「流暢性因子」と命名した。

表8 英語多読の取組み、意識に関する因子分析結果（最尤法、プロマックス回転）

項目番号	項目	因子			
		I	II	III	IV
因子I 効果認識因子 ($\alpha=.846$)					
21	英会話力向上への寄与	.932	.061	-.077	-.077
22	リスニング力向上への寄与	.870	.169	-.101	-.129
20	英作文力向上への寄与	.695	-.114	.212	.046
18	語彙力向上への寄与	.473	.047	.054	.204
因子II 多種類多読因子 ($\alpha=.747$)					
7	なるべく短い語数	.016	.720	-.306	-.121
2	様々なジャンル	.019	.674	.087	-.046
6	様々なシリーズ	.080	.627	.214	-.012
4	多くの冊数	.069	.482	-.087	.182
8	様々な語数	.068	.442	.124	.050
因子III 表現意識因子 ($\alpha=.796$)					
17	多読図書内の表現を使用	.073	.069	.834	-.126
16	英単語や表現を覚えようとしている	-.060	.036	.825	.011
14	辞書で調べる	-.010	-.154	.653	.011
因子IV 流暢性因子 ($\alpha=.667$)					
12	推測して読む	-.064	-.019	-.053	.659
19	速読力向上への寄与	.417	-.208	-.055	.573
9	7割以上の理解	-.169	.378	-.205	.490
10	流暢に読める	-.031	.380	.079	.405
因子間相関		I	II	III	IV
I		—	.337	.372	.263
II			—	.367	.367
III				—	.213
IV					—

そして、英文読解速度の上昇値に応じて分けた三群間の中で、各因子の因子得点に有意差があるかを検証した結果が表9である。

表9 読解速度上昇値別三群における因子得点

指標	群	n	M (SD)			
			効果認識	多種類多読	表現意識	流暢性
WPM	上昇群	48	0.23 (0.92)	-0.10 (0.98)	0.03 (0.94)	-0.04 (0.83)
	標準群	50	-0.18 (0.95)	0.11 (0.89)	-0.12 (0.93)	-0.02 (0.85)
	下降群	15	-0.16 (1.01)	-0.04 (0.72)	0.31 (0.87)	0.16 (0.92)
有意差			†F 上>標	n.s.	n.s.	n.s.
修正WPM	上昇群	47	0.22 (0.87)	0.10 (0.93)	0.18 (0.93)	0.07 (0.88)
	標準群	45	-0.12 (1.01)	-0.12 (0.91)	-0.29 (0.88)	-0.08 (0.79)
	下降群	21	-0.26 (0.93)	0.03 (0.78)	0.20 (0.92)	0.00 (0.93)
有意差			†F 上>下	n.s.	*F 上=下>標	n.s.

*: $p < .05$ †: $.05 < p < .10$ n.s.: 有意差なし

因子得点において三群間で統計的な有意差が見られたのは、修正WPMにおける表現意識因子であり ($F(2, 110)=3.80, p=.025$)、多重比較の結果、上昇群と下降群の値が標準群よりも有意に高いことが分かった。また、効果認識因子においては、WPM ($F(2, 110)=2.51, p=.086$) および、修正WPM ($F(2, 110)=2.39, p=.097$) とともに、10%水準での有意傾向が見られた。多重比較の結果、WPMにおいては上昇群が標準群よりも高く、修正WPMにおいては上昇群が下降群よりも高い傾向にあることが分かった。

5. 考察

前節で行った因子分析、および読解速度上昇値別三群における因子得点の分析結果から以下のことが考察できる。

表9で示されたように、修正WPMにおける表現意識因子の上昇群と下降群の因子得点が、標準群と比べて有意に高い値となった。5ヵ月間の授業内多読を行ったことによる読解速度変化の結果に関して大きく異なるこの二群が、表現意識因子に関して同じ傾向を見せたことについては、二通りの解釈を行うことが可能であり、またそのように解釈を行うことが妥当であると考えられる。

一つの解釈は、適切な選書ができ、精読とは異なる多読の読み方を理解、体現できている上で、本の中の語や表現にも注意を向けている読み方である。この場合の学習者は、自分の英語力や多読としての英語の読み方をよく理解しているため、速い速度で英語を読み進めながらも、語や表現にも意識を向ける余裕を持ちながら読んでいる可能性が考えられる。そして、このような読み方ができる背景には、上昇群の学生が自分の英語運用力をよく分かった上で、多読として読むのに適切な選書ができていることが推察できる。この多読活動の積み重ねが、意味理解を伴った英文読解速度(修正WPM値)の大きな上昇に繋がったと解釈できる。

一方の下降群も表現意識因子の因子得点が高かったが、修正WPM値が多読を通して下降

してしまった。この結果に対する一つの解釈は、精読時と同程度の強さで語や表現に意識が向いてしまい、読解速度が上がらないまま、また内容理解も覚束ないまま多読を積み重ねた可能性である。そしてこのような読み方になってしまった背景としては、自分の英語力がしっかりと把握できていないこと、分からない語や表現が多すぎる本を選んで多読を続けてしまったこと、精読的な読み方から脱するのに十分な多読量に達していないことなどが複合的に関係している可能性が推察できる。

読解速度の向上と表現意識因子の関係に関するこの結果は、語や表現に対して意識的に多読をすることが、直ちに読解速度の向上に繋がる、あるいは繋がらないと一概に言えるわけではないことを示唆している。事実、英語を読む際に語や表現に対して意識が向きやすいかどうかは個人差があり、多読を始めてからの期間や読語数、英語運用力、言語学習に対する動機づけ、言語事象に対する興味や関心などを変数にして、その時々で変化していく要素である。しかし、多読という読み方において自分のレベル以上の本を選んでしまうと、未知語に遭遇する頻度が上がることで読解速度が上がらず、速読力の養成には繋がらないことは十分に考えられる。

以上の議論から、本研究から得られる多読を通して読解速度を高めるための教育的示唆としては、学習者に多読は精読とは異なる読み方であることを説明し、理解させ、未知語が多い多読図書は避けて適切な選書ができるように指導し、多読としての読み方を体験させることが重要であるということであり、これまでの多読研究で重ねてその重要性が指摘されていること（e.g., Day & Bamford, 1998; Nishizawa et al., 2010; 高瀬, 2010）と軌を一にするものである。

また、有意傾向の水準ではあるが、WPMおよび修正WPM双方において、上昇群は多読を行うことで、英作文、リスニング、英会話、語彙の能力が向上するという認識を強く持っている傾向が分かった。実際に上昇群の学習者が多読を行うことでこれらの能力を向上させたのかについては本研究では調査ができていない。しかし、多読を行って英文読解速度を大きく上げた上昇群の学習者が、他の側面の英語力の向上に対しても効果認識を強く持っていることは示唆的である。

この有意傾向は、読解速度上昇と効果認識因子の間の相関傾向であり、因果関係を示したのではない。しかし、多読をしながら英語力向上に繋がる効果を感じていることが、多読に対する動機づけを高める可能性は十分に考えられる。そうであれば、比較的長期間に亘って行われることが多い多読指導において、学習者に対して多読のみをさせるのではなく、多読の効果が分かるようなフィードバックを取り入れることは、少なくとも一考の価値があるのではないだろうか⁽⁵⁾。例えば、英文読解速度を定期的に測ったり、語彙サイズテスト（e.g., 望月・相澤・投野, 2003）や、英語運用能力試験などを適切に取り入れることは、学習者に多読の効果を可視的にフィードバックする機会となるし、指導者にとってもその結果に応じて必要な軌道修正を行うための機会となるだろう。多読による学習効果を可視化することが動機づけに与える影響に関しては、今後の研究課題としたい。

以上の考察を基に、本研究の研究課題「英文読解速度を高めた学習者は、どのように英文を読み、どのような意識で多読を行っていたか」に対する回答は次のようになる。

英文読解速度を高めた学習者は、語彙や表現にも意識を向けながら多読を行っていた。この背景として、自分の英語力や多読としての読み方をよく分かった上で、意味を理解しながら速い速度で読める適切なレベルの本を選んで多読を行っていたことが推察される。また、英文読解速度を高めた学習者は、多読が様々な英語能力の向上に効果的であると認識して多読を行っていた傾向が見られた。

6. まとめ

本研究は、筆者による二件の先行研究の補完研究として、英文読解速度を高めた学習者はどのように英語を読み、どのような意識で多読を行っていたのかについて、質問紙調査を用いて分析し、その結果を因子分析し、読解速度上昇値別の三群間で分析することで探究したものである。本研究と先行研究を合わせ三件の研究結果によって得られた示唆は、「A1レベルの学習者が5ヵ月間の授業内多読を行うことで英文読解速度を高めるためには50,000語以上の語数を読ませる」というシラバス設計に関する指針が一つ。そして、「学習者に多読は精読とは異なる読み方であることを説明し、理解させ、未知語が多い多読図書は避け、余裕をもって語や表現に対しても意識が向くレベルの本を選ばせる」という指導指針がもう一つである。これらの示唆を得ることができたが、本研究にはいくつかの限界点も含まれていることを認めなければならない。

まず、本研究の質問紙調査で取り入れた項目の数と質問の妥当性に関する課題である。本研究で使用した質問紙調査は、読解速度の上昇をもたらす英文の読み方の質を探究するのに必要かつ十分な質問項目であったかどうか引き続き検討が必要である。質問項目の数と内容によっては、因子分析を行った結果として抽出される因子数も因子名も本研究結果とは異なる可能性があり、よって得られる考察も異なる可能性がある。多読において最も重要な指導が大量に読ませることであることは言うまでもないが、第2節で述べたように、読語数のみが押し並べて全ての学習者に高い英語運用能力を担保する唯一の条件ではない。また、多読を含んだシラバスを作成する際には、「どの程度の英語運用力を持った学習者が、どれだけの分量を、どのように読めば、どの英語の力の向上に多読が有効に機能するのか」を勘案する必要があることに鑑みれば、「どのように読めば」という読み方の質に関する奥深い領域に分け入って今後も探究を続けていかなければならないだろう。

また、本研究で質問紙調査を行った対象者は、三回の速読調査を行った学習者である。そのため、読解速度を大きく高めた学習者が、その結果が影響して他の英語能力の向上に対して効果認識を持った可能性があることは指摘しておかなければならない。

いくつかの限界点も含まれているが、二件の先行研究と本研究結果を合わせ、A1レベルの学習者を対象とした半期間の定期的な授業内多読を取り入れて英文読解速度を高めるための指導指針に関する示唆を得られたことは、多読指導研究における知見の蓄積に繋がるものだろう。

注

(1) 現在は、新多読三原則が提唱されているが、本節の議論において多読三原則との違いが

本質的な問題とはならないと考えられるため、本稿では新多読三原則への言及は行わないこととする。

(2) 本稿は、藤井（2017）および藤井（in press）では紙幅の関係で扱えなかった質問紙調査の結果と考察を扱ったものである。これら二件の先行研究の概説は本研究の議論展開のために必要であるため第3節で行っている。しかし、先行研究の全てを本稿で説明できているわけではないため、詳細は先行研究を参照されたい。例えば、読解速度向上を期間内読語数の観点からも先行研究では分析しているが、本稿では紙幅の関係で省略している。

(3) ただし、調査2と調査3の間で、処置群は2週間程度の冬休みを、対照群は5週間程度の夏休みを挟んでいる。この休暇期間の差が結果に多少の影響を与えた可能性は指摘しておかなければならない。

(4) 表7中の質問項目は、質問文を一部省略して表記している。詳細については、付録を参照されたい。

(5) 事実、平成30年度の前期の筆者の授業で多読を経験した複数の学習者から、自由記述式の質問紙調査で、「多読によって英語力がついているか効果が分からない」という回答を得た。

謝辞

本研究は、JSPS科学研究費補助金（課題/領域番号17K13518）を得て行ったものである。

参考文献

- Aoyama Gakuin University Word Level Checker. http://someya-net.com/wlc/index_J.html
- Bamford, J. & Day, R. R. (2004). *Extensive reading activities for teaching languages*. New York: Cambridge University Press.
- Beglar, D., Hunt, A., & Kite, Y. (2012). The effects of pleasure reading on Japanese university EFL learners' reading rates. *Language Learning*, 62, 665-703.
- Day, R. R. & Bamford, J. (1998). *Extensive reading in the second language classroom*. New York: Cambridge University Press.
- Fujii, K. (2017). The Mini-Bibliobattle as an output activity of extensive reading: The rationale and procedures. *Journal of The Council of College English Teachers*, 36, 77-86.
- Fujita, K. & Noro, T. (2009). The effects of 10-minute extensive reading on the reading speed, comprehension and motivation of Japanese high school EFL learners. *ARELE*, 20, 21-30.
- Krashen, S. (1985). *The input hypothesis: Issues and implications*. New York: Longman.
- Krashen, S. (2004). *The power of reading*. Connecticut: Libraries Unlimited.
- Nation, P. (1997). The language learning benefits of extensive reading. *The Language Teacher*, 21(5), 13-16.
- Nation, P. (2013). *What should every EFL teacher know?* Seoul: Compass Publishing.
- Nation, P. & Malarcher, C. (2007). *Reading for speed and fluency 1*. Seoul: Compass Publishing.
- Nishizawa, H., Yoshioka, T., & Fukada, M. (2010). The impact of a 4-year extensive reading

- program. In M. Stoke (Ed.) *JALT 2009 Conference Proceeding*, 632-640.
- Nishizawa, H., Yoshioka, T., & Ichikawa, Y. (2017). Effect of a six-year long extensive reading program for reluctant learners of English. *Modern Journal of Language Teaching Methods*, 7(8), 116-123.
- Pitts, M., White, H. & Krashen, S. (1989). Acquiring second language through reading: A replication of the clockwork orange study using second language acquires. *Reading in a Foreign Language*. 5(2), 271-275.
- Takase, A. (2012). The impact of extensive reading on reluctant Japanese EFL learners. *The European Journal of Applied Linguistics and TEFL*. 97-113.
- 魚住香子・高瀬敦子 (2016) .「多読を成功に導く要因一意識調査と読書記録手帳の精査から一」『日本多読学会紀要』9, 25-42.
- 卯城祐司 (2009) .『英語リーディングの科学』東京：研究社.
- 金谷憲 (2005) .『忙しい人の多読トレーニング・メニュー』東京：アイビーシーパブリッシング.
- 国際ビジネスコミュニケーション協会 (2018) .「TOEIC Program 各テストスコアと CEFR との対照表」Retrieved from http://www.iibc-global.org/toEIC/official_data/toEIC_cefr.html
- 酒井邦秀 (2002) .『快読 100 万語！ペーパーバックへの道』東京：ちくま学芸文庫.
- 白井恭弘 (2008) .『外国語学習の科学』東京：岩波新書.
- 高瀬敦子 (2010) .『英語多読・多聴指導マニュアル』東京：大修館書店.
- 竹内理 (2007) .『「達人」の英語学習法』東京：草思社.
- 田中茂範 (2011) .『田中茂範先生のなるほど講義録 2：英語のパワー基本語：基本動詞編』東京：コスモピア.
- 田中茂範 (2017) .「英語教育の論点：教育の条件、CLT、CAN-DO」 JACET 関東支部月例研究会講演資料.
- 西澤一・吉岡貴芳・伊藤和晃. (2007) .「苦手意識を自信に変える、英語多読授業の効果」『高専教育』30, 439-444.
- 藤井数馬 (2017) .「授業内多読による英文読解速度の変化について」『中部地区英語教育学会紀要』46, 247-252.
- 藤井数馬 (in press) .「半期間の授業内多読が英文読解速度に与える影響について一英語運用力および読語数からの指導指針とともに一」『中部地区英語教育学会紀要』48, 頁未定.
- 古川昭夫 (2010) .『英語多読法一やさしい本で始めれば使える英語は必ず身につく』東京：小学館新書.
- 村野井仁 (2006) .『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』東京：大修館書店.
- 望月正道・相澤一美・投野由紀夫 (2003) .『英語語彙の指導マニュアル』東京：大修館書店.

付録

<多読図書の選書>

●英語多読をする時に、現段階で以下のことをどの程度意識していますか。最も近いもの一つを選択してください。

	強く意識している				全く意識していない				
(1) 好きなジャンルの本を読む	5	-	4	-	3	-	2	-	1
*「ジャンル」とは、例えば、推理もの、冒険もの、ヒューマンドラマ、スリラー等のことを指す									
(2) 様々なジャンルの本を読む	5	-	4	-	3	-	2	-	1
(3) 多くの語数を読む	5	-	4	-	3	-	2	-	1
(4) 多くの冊数を読む	5	-	4	-	3	-	2	-	1
(5) 好きなシリーズを読む	5	-	4	-	3	-	2	-	1
*「シリーズ」とは、ORT、FRL、PGR、OBW等のことを指す									
(6) 様々なシリーズを読む	5	-	4	-	3	-	2	-	1
(7) なるべく短い語数の本を読む	5	-	4	-	3	-	2	-	1
(8) 様々な語数の本を読む	5	-	4	-	3	-	2	-	1
(9) 7割以上の理解度を得られる本を読む	5	-	4	-	3	-	2	-	1
(10) 流暢に読める(WPM 100程度で読める)本を読む	5	-	4	-	3	-	2	-	1

<英語の読み方と意識>

●英語多読をする時、現段階で以下の読み方はどの程度当てはまりますか。最も近いもの一つを選択してください。

	強く意識している				全く意識していない				
(11) 分からない英単語や英語表現に出合った時は、その意味を考えずに飛ばして読む	5	-	4	-	3	-	2	-	1
(12) 分からない英単語や英語表現に出合った時は、その意味を推測して読む	5	-	4	-	3	-	2	-	1
(13) 分からない英単語や英語表現に出合った時は、その意味を考えるために繰り返し読む	5	-	4	-	3	-	2	-	1
(14) 本を読み終わった後、分からない英単語や英語表現を辞書で調べる	5	-	4	-	3	-	2	-	1
(15) 英語を読む時、分からないところを飛ばしても気にならない	5	-	4	-	3	-	2	-	1
(16) 多読図書で気に入った表現や英単語を覚えようと心がけている	5	-	4	-	3	-	2	-	1
(17) 多読図書で気に入った表現や英単語を英作文や英会話で使おうと心がけている	5	-	4	-	3	-	2	-	1

(18) 英語多読は語彙力向上に有効だと感じる	5	-	4	-	3	-	2	-	1
(19) 英語多読は速読力向上に有効だと感じる	5	-	4	-	3	-	2	-	1
(20) 英語多読は英作文力向上に有効だと感じる	5	-	4	-	3	-	2	-	1
(21) 英語多読は英会話力向上に有効だと感じる	5	-	4	-	3	-	2	-	1
(22) 英語多読はリスニング力向上に有効だと感じる	5	-	4	-	3	-	2	-	1

学会・セミナー報告
2018年度 日本多読学会年会

平成30年度の日本多読学会年会・総会は、8月4日(土)、8月5日(日)の二日間、SEG(東京都新宿区)と東京工業高等専門学校(東京都八王子市)にて行われた。初日は「多読図書・洋書祭り」として、書店・代理店展示と賛助会員による多読図書・教材紹介セッション、多読図書の紹介発表、多読教室見学、総会、懇親会、二日目は高山芳樹・東京学芸大学教授による特別招待講演と研究発表・実践報告が20分または45分の発表枠で行われた。事前申込81名(会員56名、非会員25名)、初日63名、二日目69名、当日参加が両日とも数名加わった。

初日のセッションは以下の通り。

- ・古川昭夫(SEG)「SEGの多読コースの概要・図書貸出システム・指導に使っている基本図書・生徒に人気のあるシリーズ・YA本について」
- ・吉岡・西澤・大野(豊田高専)「社会人向けに開発した多読支援アプリのデモンストレーションと、新たに整備した図書や所蔵館のデータベースの課題について」

そして、賛助会員の出版社・代理店による多読図書、多読向け教材、オンラインプログラムの紹介があり、会場内の展示で実際に多読向けシリーズ等を手にすることもできた。「多読図書・洋書祭り」は洋書や英語教材出版の最新動向を知る機会となった。

- ・(Pearson Japan) Pearson Marvel Readers, Pearson English Story Readersの紹介
- ・(Nellies) Black Cat Readers他、Nellies扱いのリーダーシリーズの紹介
- ・(コスモビア) 読み放題システム「多読の森」の紹介
- ・(mpi松香フォニックス) mpiのオリジナル絵本、Building Blocks Library、秋の新刊紹介
- ・(Tryalogue Education) Future Jobs Readers (出版社: Seed Learning)等の紹介
- ・(McGraw-Hill) Joy Cowly Stories等の紹介
- ・(BookSmart) 多読リーダーズセット、オンラインリーディングプログラムの紹介

二日目は会場を東京高専に移して、多読学会会員による研究発表、多読授業報告が行われた。特別招待講演は高山芳樹・東京学芸大学教授をお迎えして「多読・多聴の学習習慣形成を意図したラジオ番組～NHKラジオ『エンジョイ・シンプル・イングリッシュ』制作の舞台裏～」について話していただいた。NHKラジオ英語教育番組の中でも斬新な企画が実を結び、実際に放送する番組を制作し、放送するまでの、多くの過程と気の遠くなるような工夫・取り組みの数々が紹介された。ユーモアあふれる語り口の中で、やさしく面白い英文題材を作り上げる「制作の舞台裏」が述べられたが、そこには大変な労力と時間とそして卓越した技が必要だったことが伺えた。昨年度の年会(第4回国際多読教育学会共催)招待講演者のCambridge English Readersのシリーズ監修者 Philip Prowse氏に引き続き、英語学習者のための多読図書・多聴教材を私たちが手にすることができる有難さを感じる講演であった。

研究発表、実践報告のプログラムを以下に示す。

時間帯	種別	発表者	題名	要旨
10:20～ 11:10	実践 報告 50分	鬼丸晴美 (明星中学校・ 高等学校)	中学1年生・2年 生を対象とする週 1時間の多読授 業報告	年間で100万語超えを目標。現在の中学3年生は1年時にORT音声ペン導入で多読授業に変化が起き、相対的積算単語の増加が見られました。2年生は従来2種類配信していたebookを1種類としbookletを作成した事で家庭学習時間を確保することができ、100万語を超えました。今年度の取り組みは計画的な家庭学習と音声ペンでORTと英和辞典使い方指導。3ヶ月で100万語を超える生徒が出るポイントなどを考えていきます。
10:20～ 11:10	研究 発表 50分	吉澤清美 (関西大学)・ 高瀬敦子 (関西学院大 学)・ 大槻きょう子 (奈良県立大 学)	多読が文法力と 読解力の発達に 及ぼす影響とその 関連性	吉澤他(2017)は多読による文法力の向上を報告したが、文法力と読解力との関連性を検証した研究は殆どない。本研究では多読が読解力の発達に及ぼす影響と、文法力との関連性について検証するため、多読プログラムで一年間学習する大学生にEPER 読解テストと日英バイリンガル文法テストを実施した。継続的な多読により学習者の読み方がどのように変化するか、その変化が文法能力の発達といかに関連しているかを報告する。
11:15～ 11:40	実践 報告 25分	笠井照彦 (ワオ・コーポ レーション)	「しくみ」で実現す る小学生向け多 読プログラムの全 国展開	今春より、全国16府県、60以上の教室にて、1000名を超える子どもたちが「多読」を柱とした小学英語プログラムで学び始めました。全国展開を可能にした「しくみ」や「ツール」、実践とその理論背景について紹介します。
11:15～ 11:40	研究 発表 25分	小野寺進 (弘前大学)	高等教育機関で の多読授業の評 価方法について	大学などの高等教育機関において通常の英語授業で多読を展開し単位を出す場合、多読自体が学生の主体的活動であるため、定期試験などで理解力を測定する以外に評価することが難しい。今回の発表では、ルーブリック評価法をカスタマイズすることで、試験を用いずに多読力を判定し、評価する方法を考えてみたい。

11:45 ～ 12:10	実践 報告 25分	高瀬敦子(関西 学院大学)	小学生多読の 特徴と工夫	小学生の多読には音声導入が不可欠である。歌・CD・読み聴かせおよび耳からの語彙インプット・BBカード・ゲーム等で耳を鍛え、徐々に自分でCDや音声ペン(ORT)の音声を理解し、文字と結び付けて読めるようにする。クラスでは音読チェックをしながら内容把握(英・日)も行いながらストーリーの面白さを共有する。様々な興味・特長を持つ小学生に対応すべく行っている工夫、種々の音声・文字導入方法を紹介する。
11:45 ～ 12:10	実践 報告 25分	宮本恵理子 (桐蔭学園高等 学校)	大規模私立進 学高校での多読 導入	中学と高校が併設されている本校では、中学で多読指導は5年前から行われていた。高校まで多読指導を広める試みとして何度か研修会を行ったりしたが、高校での広まりは難しかった。しかし、今年度、高校1年全27クラスで多読を導入することになった。その経緯と教員の変化、生徒の様子を紹介する。
14:10 ～ 14:35	実践 報告 25分	奥山 則和 (桐蔭学園)	私立中学での フォニックスの導 入から多読への 移行の試み	5年前に3年生に半年間だけ多読の授業を始め、3年前に1年生から多読をやるようになり、1年生は前期にフォニックス、後期に多読を行い、2年生からは多読のみを行った。昨年度から、前期で指導したフォニックスの定着を目指し、後期ではやさしいフォニックスルールで楽しく読める絵本を使い、多読・多読の導入を行っている。カリキュラムの変更によって見られた変化、課題などを共有したい。
11:45 ～ 12:10	研究 発表 25分	藤井数馬 (長岡技術科学 大学)	YL=Lexile換算 表試案の作成と 多読指導での実 用性	本研究では、多読図書約2,300冊のデータをもとに作成したYL指数とLexile指数の換算表の試案を提示する。さらに、その換算表の多読指導における実用性として、検定教科書と多読指導の位置づけ、英語絵本のリーダビリティの把握、シリーズ間の英文難易度の把握に有用性があることを主張する。
14:40 ～ 15:05	実践 報告 25分	伴野恭士(水口 東高校)・山下 泰世(水口東中 学・高等学校)	多読用教材を通 して、自主的に 英語を読む態度 を育成する指導 工夫	中高一貫した6年間の取り組みとして、読む力に焦点を当て、多読教材を用いて生徒の思考力や自主的な読書態度を高める取組を行ってきた。学びの活動グループとしてBook Circleを作り、選んだ本を読み、内容について役割ごとに話し合う。活動のまとめとして、ポップ作りやビブリオバトルを

				行なった。英語を読むことに興味を持つ生徒や教科書の本文を深く読むことができる生徒が増えたように感じる。
14:40 ～ 15:05	実践 報告 25分	山田 崇人 (成蹊大学)	オンライン多読 支援システム Xreadingを導入 した効果	多読授業の悩みの一つは、授業外での多読があまり実践されないことである。そこで、いつでもどこでも多読が行えるXreadingを試験的に導入してみた。それによるメリットやデメリット、様々な困難とその改善策等も含め実践報告を行う。
15:10 ～ 15:35	実践 報告 25分	サム マーチー (尚絅学院大 学)	多読ベース授業 から難易度別段 階的アウトプット 機会の作出の一 例	600冊以上を多読した小学3年男児の多読ベースのレッスンを米国児童向けに開発されたBrainquest ワークブック(Workman出版)を導入した。年齢適応の理科、算数、社会、フォニックス、など広汎な領域で平易な英語で解答可能な段階的学習用ライティングアクティビティーもあり、英語の出力機会が増えることに伴う文法学習効果も得られた。分野別の偶発的語彙習得効果が見られた。活用上の限界も紹介する。
15:40 ～ 16:05	実践 報告 25分	宮下いづみ (Eunice English Tutorial)	小学生クラスで の絵本の活動、 多読授業	英語の絵本を使った授業の活動報告です。小学1年生から6年生までの各クラスで実施している日常的なレッスンの流れ、宿題、小学生たちの反応、人気のある本などについて授業の様子をお伝えします。通常のクラスでの多読と、小学生多読クラスとの2種類のクラスの活動報告です。
15:10 ～16: 00	研究 発表 50分	西澤 一・吉岡 貴芳・市川裕理 (豊田工業高等 専門学校)	100万語読破者 における継続年 数の効果	高専生の100万語読破者103名を多読継続年数により5年以内と6～7年の2群に分け、100万語読破時のTOEIC得点平均上昇率(得点/語数)を比較したところ、後者が前者よりも有意に高かった。また両群の学生の読んだ本(のYL分布)には差はなかった。年間20～40万語程度の読書ペースの場合、短期間(5年以内)に頑張っ読むより、より長期間をかけてゆっくり読んだ方が効率的な可能性がある。

文責: 神田みなみ(千葉県立保健医療大学)

学会・セミナー報告

2017年度 第11回 関西多読指導者セミナー

2017年度第11回関西多読指導者セミナーは、2018年2月18日（日）に京都外国語大学にて開催された。セミナー参加者は168名（会員34名、非会員134名）、多読図書展示出版社及び書店はカタログ・サンプル図書展示のみの会社も含めて13社であった。

今回は午後の一部で別教室にて児童英語に特化した発表が行われた。

セミナー会場である京都外国語大学では、MReaderを使用した2年間の多読プログラムに入学学生全員が取り組んでいて、多読を行ってTOEICの結果が非常に伸びた学生が多数いる。特に2年間でTOEICによって飛躍的な（400点前後）伸びを見せた学習者の皆が100万語を突破しているという特徴がある。多読は全学的な取り組みであるため、ネイティブと日本人の専任教員の混合で構成された多読促進のための研究チームによって、テーマ別多読本のパンフレットや達成語数別の記念バッジの作成等、多読を促進するための様々な取り組みがなされている。尚、新しい試みとして、Web上で書籍も読めるXreadingを用いた多読指導や、自らの多読の進捗によって、途上国における読書プログラムのための寄付集めが実現する、コミュニティ・エンゲージメントプログラムも行われている。また、非常に充実した多読室（図書館第五閲覧室）の見学ツアーでは、学生と多読プログラムのコーディネーターであるキャンベル先生によって、詳しいプログラムや本についての説明があった。

発表内容

「なぜ多読？多読の必要性とその効果」

高瀬 敦子（関西学院大学）

英語多読を成功させるには、まず、言語習得にとってなぜ多読が必要なのか、授業最初のオリエンテーションで学習者を納得させ、動機付けをすることが不可欠であり、そのためには、まず指導者が自ら多読を実践し、その効果を実感しておくことの重要性が指摘された。最初に何をどのように説明すれば、学習者がやる気を起こすかの紹介もあった。

「多読ライブラリの作り方—基本から応用まで」

黛 道子（日本保健医療大学）

予算を有効に使って上手に図書を選び、組み合わせるコツなど、使いやすい多読ライブラリの作り方を事例や予算案と共に紹介された。

「民間英語教室における小学生対象の多読実践・私立中学校における授業内多読実践について」

諸木宏子（A & A ENGLISH HOUSE・西大和学園中学校）

小学生が週1回のレッスンの中で、どのように多読に取り組んでいるかの紹介と、私立中学校で中2・中3生に行っている授業内多読（週6時間の英語の授業のうち1回の50分授業を多読にあて、図書室にて約5000冊以上の多読本を読んだり、聴いたり）の取り組み

が紹介された。

「イギリスの小学校でのリーディング教育－ORTの使用法とは？」

藤岡千伊奈（流通科学大学）

レベルド・リーダーズが実際にイギリスの小学校でどのように使用されているかについて現地調査の結果を紹介。フィールド・ワークを実施した二校（ORT使用校含む）での、レベルド・リーダーズを用いた授業、使用されているシリーズ・タイトル、現地の教員・児童のORTへの反応等が紹介された。

「中学男子も夢中になる多読多聴の授業実践～開始から継続の秘訣全部見せます」

西山哲郎（東大寺学園中・高等学校）

教科書、学習参考書、問題集に限られた英語学習や英語教育の閉じた学びを根本から変えるインパクトを持ったアプローチとして、多読指導が、楽しく、そして4技能の涵養に絶大な効果を得ていることが紹介された。多読の導入と継続が教え子たちにどのような変化をもたらしたのかについて紹介があった。

「県立普通科高校における多読指導」

池田亜紀（鳥取県立境高等学校）

末次瑞子（鳥取県立米子東高等学校）（キャンセル）

鳥取県立境高等学校での実践報告。多読導入のきっかけから選択科目に至るまでの過程、生徒の反応や生徒に人気の図書紹介、評価方法、地域と連携した活動、指導をして行く過程で見えてきた問題点など、具体的な指導内容が報告された。

「小学生向け 多読スタートアップ入門」

樫本洋子（大阪教育大学・Global Kids英語教室）

これから多読指導を小学生に始めようとお考えの先生方に、何から準備を始めたらいいか、読めない児童にどう指導したらよいか等、多読指導の基本について、自教室での実践を交えながらのワークショップが実施された。

「児童英語講師対象 初心者のための多読スタートアップ講座」

諸木宏子（A & A ENGLISH HOUSE・西大和学園中学校）

「新たに多読を始めたいが多読をスタートするには、どのような準備が必要か？」という質問に答えた“初心者向け講座”であった。「多読とは何か？」「語数をどうやってカウントしたらいいのか？」「多読手帳の記入って？」「YLとは何ですか？」といった初歩的な問への回答から始まり、初心者向け、小学生向けのおすすめ多読用図書の紹介もあった。

“Implementation Issues in a Large-Scale Extensive Reading Program”

a.) “The Extensive Reading Program at KUFS: Structure and Practice”

Aaron Campbell（Kyoto University of Foreign Studies）

In its 7th year now, the extensive reading program at Kyoto University of Foreign Studies (KUFS) provides more than 2,000 learners the opportunity to improve their English through reading. In this session, the presenters described the structure of the program and how it is implemented. They also shared unique aspects of the program designed to help students to choose books and motivate them to read more. Finally, they discussed some of the challenges they faced to this type of approach to extensive reading and how they went about dealing with them.

毎年2000名近くの学習者が多読に取り組む、本校での多読プログラムは7年目を迎える。プログラムの概要や導入の仕方、及び学習者の多読を促すための様々な試みなどが紹介された。

b.) 「多読プログラムにおける学習プロセス：2年間のインタビュー分析から」

吉田真美（京都外国語大学）

2年間の長期的な研究によって、学習者が辿る多読プログラムにおける学習プロセスが考察された。読解プロセスやリーディング活動への態度が著しく変化する多読開始後とは異なり、その後は教員やクラスメートによる影響が大きくなることがインタビューデータから示された。さらに3年生以降に用意されているポスト多読のプログラムとして、ペーパーバックを読み進めるIndependent Reading Programにおいては、学習者がどのように多読で培った流暢な読みや学習管理のストラテジーなどを生かして読み進めているかということが考察された。多読からオーセンティックな読み物へというプログラム間のスムーズな移行のためにも、教員研修や、リーディングコミュニティの育成、等、大学規模のリーディングプログラムとして、高い学習効果をあげるための施策が提案された。

「学習者の多読実践報告」（京都外国語大学）

板橋遥花（イタリア語学科2年）・ 井上元太（英米語学科3年）

多読の経験によってどのような変化がもたらされたのか、TOEICにおける伸び、といった結果だけでなく、どのようなタイプの本をどのように読み進めたのかという体験談が紹介された。

今回初めての試みとして行った、会場校である京都外国語大学の多読経験者2名の発表が、とても新鮮で非常に好評であった。必ずしも指導者がSSSのアプローチをとっていなくても、学習者自身が積極的に大量の多読に従事することで英語力が飛躍的に伸びたという、自立した学習者の例であった。一方、全学的な取り組みであるため、教員間における多読指導への理解やアプローチが様々であり、教員の多読への関与の仕方が学習者の学習の進捗状況や多読への動機づけに大きく影響している、というのは、多読を推進する上での大きな障害である。学習者への働きかけだけでなく、教員への多読指導への理解と指導法の向上をいかに促すかということが、多読プログラムを成功させるための重要課題であろう。

別室で行った児童英語・小学生英語部門の参加者は多く、小学校での英語科目導入に備えての指導者の興味の高さがうかがわれた。今後も初期英語学習者対象に多読指導を行う指導者が増えていくことと思われる。

文責：関西学院大学（非）高瀬敦子・京都外国語大学 吉田真美

学会・セミナー報告

2018年度 日本多読学会主催 第6回九州多読教育セミナー&WS

九州多読教育新人セミナーは今年度で6回目である。

地方における多読セミナーとして掲げている3つの目標

- ①学内の教職員の多読に対する理解を得ること
- ②近隣地域への多読普及
- ③仲間作り

2つの新たな試みとその結果

1. 授業公開を含め3日間とした

⇒3日間の延べ参加者数は90名を超え、3日間とも参加した人は14名であった。

2. 親子で参加できる時間を2日目の午前中に設けた

⇒親子で参加された方は4組おられました。大変好評で、「1日OKだともっと助かります」との感想もありました。今後も、小さなお子さんがおられても気軽に参加できるようにしていきたい。

以下公開授業とセミナーの様子を参加者の感想を交えて紹介する。

日時：2018年11月2日（金）、3日（土）、4日（日）

場所：11月2日（金）福岡女学院中学校・高等学校

11月3日（土）福岡女学院中学校・高等学校

11月4日（日）筑紫女学園中学・高等学校

[[[1日目：授業公開&実践報告]]]

5 限目 高1-1 コミュニケーション英語 坂本@図書館

- ・ Story Telling・・・テーブルの上に乗って読み聞かせ
- ・ Silent Reading・・・自分で選んだ本で黙読

「読み聞かせがとても生き生きとしていたのに驚きました。内容も、幼い子向けでしたが、それくらいでも楽しめるのだということが分かりました。」「生徒さんたちがバラエティに富んだ本を選んでいて、やはりたくさんの本の中から選べる環境が大切だと思いました。」

6 限目 高1特進クラス コミュニケーション英語 多聴多読授業 坂本@LL教室

- ・ 読み聞かせ・・・プロジェクターを用いて読み聞かせ
- ・ 多聴多読・・・自分で選んだ本で聴き読みあるいは音読書

「（読み聞かせで）全員で本が見えるようにされているのがとてもよいと思いました。」「1人1人絵がちゃんと見えているからか、読み聞かせの時にクラスの一体感がありました。」「音声が豊富にあり、生徒が集中して音声と共に学んでいる様子が印象的でした。」

放課後 実践報告 小野未来子（福岡女学院大学図書館司書）＋坂本彰男（中高英語科）
「思わず行きたくなる、思わず手に取りたくなる。学校図書館はそうあるべきだと改めて思いました。」「特に印象に残ったのが、『Fluency First』と『森を見る力』です。Fluency Firstを実践していくために、評価の方法にも工夫を加えてもらってところが素晴らしいと感じました。」

[[[2日目：実践報告]]]

児童英語の部：絵本読み聞かせ&実践発表 藤村早苗（子供英語教室サンフラワー）
「静かな語り口調がとても心地良かったです。子ども（小さい）向けの読み聞かせを披露して下さったのですが、優しい声、落ち着いた雰囲気作りが大切だと改めて実感しました。」「『自然な環境で』と言われていましたが、本当に自然に子どもたちの周りにトーンが漂っているようなイメージでした。」

英語サークル：坂本彰男（福岡女学院中高）with参加者（津留崎・湯川・吉村・國分・立石）
「言葉を通してのコミュニケーションが上手な子が英語学習もつよい！本当にそうだなと私自身も感じています。」「『Book Club』のようなコミュニティは本当に大事だと感じます。是非参加してみたいです。中高生や留学生にも参加を勧めたいと思いました。」

図書館多読の部：西澤一（豊田高専）with小野未来子（福岡女学院大学図書館）
「易しい本をたくさん、というのがよく分かりました。慌ててムリして多読させない方がよいですね。地域の振興までお考えになった壮大な計画恐れ入ります。」「優秀な多読の読書記録しか見たことがなかったので、とても安心して好感が持てました。65歳を過ぎたら私設図書館をしようかなと思っていましたが、公立に働きかけた方がいいのかなと思いました。」「司書の方の目線でのお話、情報も貴重でした。」

中高の部：山下陽子（鷗友学園女子中高）
「ピリーフについてのお話は目から鱗でした。アンケートから見える点とか大変参考になりました。皆さん生徒にどんどん読んで欲しいと思っているのですが、いろんなハードルがあって苦労しておられると思います。どんな条件だと多読が進むのか？ は感覚的にしかやってこなかったのですが、このように客観的に分析されているのを聞くと、自分の実践が何だったのか振り返ることができありがたいです。」「英語を好きになってもらおうと、他の力もある程度ついてくるというデータがあることに強められた気がします。」

大学の部：高瀬敦子（関西学院大学・非）
「多読の良さ、その勧め方のポイントが良く分かりました。高校でもなんとか導入出来ればと思います。」「モチベーションの話がありましたが、やはり図書室でもそうですが、読む→楽しい→友だちも読む→知る→読む、と人の関わりが大きいと思いました。分析の上でDemotivationを取り除かれたらというところに愛情を感じました。」

[[[3日目：実践報告 @筑紫女学園中高]]]

絵本読み聞かせ体験 (Story Telling) : 坂本彰男 & セミナー参加者

「参加者の皆さんが様々なジャンルの/内容のお話の読み聞かせをして下さるのを聞くのは楽しかったです。個性が反映されていて、思っていた以上に良かったです。」 「スクリーンに絵本を表示されながらのstory tellingで、楽しく行えて良かったです。自分でも実際に行くことで、表現を工夫しようとしたり、gestureを交えたりしたことで、坂本先生が行われている読み聞かせを疑似体験出来ました。こちらも楽しむという気持ちが大切だと思いました。」

児童英語の部：國分晶子 (アップル・イングリッシュハウス)

「『騙されてよかった！英語の本を読んで泣いたり感動したり、多読を始めて、精読では越えられない壁を越えた』というご発言にとっても共感しました！」 「レッスンの様子をビデオで写していただいたのは、とても分かりやすく参考になりました。多読の効果を実際に示されていて、恐る恐る取り組んでいた私も自信をもってやっていこうという気持ちになりました。」

中高の部：桑原しのぶ (香蘭女学校中高)

「実践の様子が詳しく見られて良かったです。特に、生徒への声かけもビデオで拝見できて、勉強になりました。教師自身が多読を続けることの大切さも実感しました。」 「ざっくりと色々なお話が伺えて楽しかったです。失敗談を言われていましたが、様々な取り組みの様子、ご苦労なさっている様もよく分かりました。生徒個人個人の立場に立ってきめ細かく本のアドバイスをなさっていることに感心しました。」

昨年同様九州近隣の参加者が多く、また親子での参加、小学校の先生・家庭科の先生・図書館司書さんの参加など、様々な方々の参加があり、英語読書の広がりを感じさせる会であった。

近年児童英語教育関係者の参加が増えてきているが、今回は偶然3日目の日曜日に他の児童英語関係のセミナーと日程が重なったため、参加者が思ったほど伸びなかったことが残念であった。

来年度は親子で参加出来る枠の拡大や横への広がりを目指していきたい。
発表者の皆様、遠方よりお越しくくださった皆様、参加者して下さった皆様、セミナー開催にあたり企画運営を陰ながら支えて下さった日本多読学会の皆様方に感謝いたします。

文責：福岡女学院中高 坂本彰男

学会・セミナー報告

2018年度 児童英語部会 初夏のセミナー 及び 秋のセミナー

2018年に開かれた日本多読学会児童英語部会の「児童英語部会初夏のセミナー」及び「児童英語部会秋のセミナー」について報告する。

今年も児童英語部会は、斎藤美紀、高原郁子、三浦洋子、宮下いづみ、川上由紀の5名のボランティアで運営している。

1. 児童英語部会初夏のセミナー

開催日時 : 2018年6月17日(日) 午前10:00~12:00

開催場所 : IKE・Biz としま産業振興プラザ6階 第2会議室

テーマ : 多読を促進する様々な活動について考える

参加人数 : 参加人数21名(うち非学会員11名)

【内容】

1. 「聞き読みから自立読みへのサポート」

小5から中1くらいまでの生徒に対するレッスンの組み立てについて紹介した。

CDを利用したの平行リーディングと目で文章をきちんと追っているか、ページをめくりが合致しているかななどを観察してサポートする。読めるという成功体験を、生徒にさせてあげることで自信をつけさせる。(担当: 斎藤美紀)

2. 「多読と小学生・中高生のライティング」

各クラスのレベルに合わせて到達目標を決め、書きたいテーマの調べ学習を促す。

正確さよりは書き方の手順や構成の仕方に注目させる。(担当: 宮下いづみ)

3. 「ノンフィクションのシリーズを利用したレッスンプランの組み立て」

メインのノンフィクションのシリーズを決める。(例 Oxford Reading Tree in Fact、Oxford Read and Discover、Longman Info Trail)

多読をするとともに、テーマを月ごとに決めて、ノンフィクションシリーズを読んでボキャブラリーを強化する。(担当: 川上由紀)

4. 「お勧めの多読本・絵本・シリーズの紹介」

最近の各教室で人気のある絵本や、レッスンでどう読んだかについて紹介した。

(担当: 三浦洋子・高原郁子)

参加者からは、

- ① CDを聞いて読む時にどういう点から生徒が理解していると言えるのか。
- ② フォニックスをどの時点でどのように導入するのか。
- ③ 文を覚えてくるが、その場では読めない生徒をどうするか。

などの質問があり、それぞれ討議が行われた。

また、もっと聞きたいと思う内容が多く、今後は午前・午後を通したセミナーを希望するという意見があった。多読を取り入れている英語教室・学童保育・小学校・塾まで幅広い指導者が参加していた。児童英語部会のセミナーに対し、様々な需要があるということが感じられた。今後もサポートができることを希望するものである。

文責 児童英語部会世話役 川上由紀

2. 児童英語部会 秋のセミナー

開催日時 : 2018年11月18日 (日) 10:00~16:40

開催場所 : 品川きゅりあん (品川区立総合区民会館) 4階研修室

テーマ : 小学校英語—2020年完全実施に向けての実践と課題

参加人数 : 22名 (うち非学会員11名)

【午前の部：実践講座】

1. *Waiting* by Kevin Henkes を使ったレッスン展開

表紙に描かれた動物を生徒にあてさせるなど、絵本の「絵」を効果的に使ったレッスンの展開の仕方を1冊の絵本で実践してみせた。 (担当: 三浦洋子)

2. 英語絵本の読み聞かせ全般について

読み聞かせ向き絵本の選び方、シーズン絵本の紹介 (*Mr. Willowby's Christmas Tree*の読み聞かせ)、公立小学校での英語絵本導入時の考察。 (担当: 斎藤美紀)

3. 英語絵本を使った音読発表会

Floppy Floppy (ORT) を使った小学生による音読発表会を当日の動画とともに紹介。また、発表会に使いやすい絵本の紹介。 (担当: 高原郁子)

4. 英語絵本を使ったアクティビティ

低学年・中学年・高学年別のアクティビティを具体的に紹介。各年齢層にあった形で取り組ませることで楽しく興味を持って取り組める。 (担当: 宮下いづみ)

【午後の部】

1. 「小学校英語—到達目標と評価基準の設定：CEFRとの関連で」

岡 秀夫 (金沢学院大学教授、東京大学名誉教授)

小学校英語には、多様な言語・文化への気づき、コミュニケーションに対する積極性や態度の養成、自己認識の強化による自立心・自尊心の養成など重要な役割がある。

現段階での小学校英語の課題は教員養成及び評価だが、評価の部分についてCEFRのA1部分をさらに3段階に分けた日本型CEFRを提案。

2. 「絵本を使った読み書き指導—あなたは何を教えますか？」

樫本洋子（大阪教育大学非常勤講師）

読み書き指導の前に英語のリズム、音に親しむ下地作りが重要なので、絵本を使用する意義は大きい。

「絵本」とは「絵」を読むものであるという基本に立ち返ってみよう。

The Red Book by Barbara Lehman（文字なし絵本）を使った絵に対するQ&Aレッスンで、生徒がより活発に意見を出したという実例の提示。

3. 「公立小学校における多読指導の取り組み例」

川上由紀（埼玉大学教育学部附属小学校講師）

ALTとのTTで小学校3年生～6年生に教科書を使用して指導しているが、多読は“fluency”を向上させる大切な要素と考え、今年度予算でORTを購入してもらう予定。現状では英語読書はスポット的な導入となりそうだが、ALTの理解もあり、業間の読み聞かせ、学期末などに取り入れたいと考える。

4. 分科会

公立小学校とそれ以外の2チームに分かれて質疑応答での情報交換。

【まとめ】

公立小学校の教員、外国語活動のサポートをしている講師、教員を目指す大学生など異色の参加者もあり、実践的な内容で有意義なセミナーとなった。

大阪から北海道まで各地から参加していただき、ここに感謝を表したい。

文責 児童英語部会世話役 斎藤美紀

日本多読学会会則

第一章 総則

第1条 本会は日本多読学会と称し、英語名称を Japan Extensive Reading Association とする。

第二章 目的および事業

第2条 本会は世の中の人々がだれでも外国語を使えるようになることをめざして、多読を中心とする外国語獲得の方法を研究し、その普及を計るものとする。またそのために、多読用図書の発掘、評価、開発、ならびに会員同士の親睦を深めることを目的とする。

第3条 本会はその目的を達成するために、次の事業を行う。

- (1) 年会・新人セミナー・ワークショップ等の開催
- (2) 紀要の発行
- (3) 研究者の研究活動への支援
- (4) 学習者の学習活動への支援
- (5) 上記に関連するその他の事業

第三章 会員

第4条 本会は次の会員で構成される。

- (1) 本会の目的に賛同する個人会員
- (2) 本会の目的に賛同する団体会員
- (3) 本会の目的に賛同する一般賛助会員
- (4) 本会の目的に賛同する特別賛助会員

いずれも、入会にあたっては個人会員あるいは団体会員の責任者1名の推薦の上、役員会の承認を得るものとする。

第5条 会員は、次の場合その資格を失う。

- (1) 退会の希望を本会事務局に届け出たとき。
- (2) 会費を1年以上滞納したとき。
- (3) 本会の目的に反する行為、または本会の名誉を著しく傷つけたと役員会が全員一致で認めたとき。
- (4) 死亡したとき、あるいは法人が解散したとき。

第四章 役員等

第6条 本会に次の役員を置く。

- (1) 会長：1名
- (2) 事務局長：1名
- (3) 理事：若干名
- (4) 監事：1名

上記の他、必要に応じて名誉会長・顧問・副会長を置く。

第7条 本会の役員は役員会の承認を経て個人会員から選出する。但し、次の総会にて承認を得るものとする。

第8条 本会の役員は、本会の目的を達成するために尽力する。

第9条 役員任期は1期2年とし、重任を妨げない。

第10条 役員会の召集・議決は次のとおり行う。

- (1) 役員会は、事務局長が召集する。
- (2) 役員会は、Mailing List で議決できる。

第11条 会則施行細則等、本会の運営に必要な細則は、役員会で定める。

第五章 会議等

第12条 総会は、会長、事務局長あるいは監事が召集する。総会の議決権は個人会員および団体会員の責任者のみが持つ。

第13条 本会における発言は会員に限る。但し、会議の議長の承認を得た者はその限りでない。

第六章 会計

第14条 本会の経費は、細則に定める会費、賛助金、その他の収入をもって充てる。

第15条 会計年度は毎年6月1日に始まり翌年の5月31日に終わる。

第16条 本会の収支決算は毎年会計年度終了後に作成し、監事の監査を経て毎年の定例総会に報告し、承認を得なければならない。

第七章 補則

第17条 本会則の変更は必要に応じ役員会で行う。

第18条 本会の事務局は、新宿区西新宿7-19-19に置く。

多読学会会則施行細則（2018年4月1日施行）

1 入会の際の紹介者

個人会員・団体会員で紹介者がいない入会希望者については、役員が個別に連絡をとり、必要に応じて紹介者になるものとする。

2 会費の納入期限

各会員は、1年分の会費の納入は、毎年4月末までに、翌会計年度の会費を一括で支払うものとする。新規入会の会員は、入会時にその年度の会費を一括で支払うものとする。

3 個人会員の会費

個人会員の会費は、年会費4,000円とする。

4 団体会員

団体会員は、本会の趣旨に賛同する団体（学校・企業・教室）とする。

団体会員の会費は、1口年間4,000円とし、年払いとする。

1口につき、1名が個人会員と同じ条件で、本会の主催する会合に出席できる。

5 一般賛助会員

一般賛助会員の会費は、年12,000円とする。

一般賛助会員は、次の権利をもつ。

(1) 1口につき1名の本会の主催する会合への出席

(2) 語学に関する自社出版物のMLを利用とした情報提供（年1回以内）

6 特別賛助会員

5口以上賛助会費を納入する一般賛助会員を特別賛助会員とする。

特別賛助会員は、一般賛助会員の権利の他、次の権利をもつ。

(1) 本会の会合における優先的な出展

(2) 自社出版・取り扱いの多読用図書の会員への情報提供（年4回以内）

(3) 多読図書あるいは多読授業用図書の出版・販売に関する相談

7 会費の用途

本会の会費は、紀要の発行、年会・ワークショップ・研究会・講演会の費用、多読の効果研究のための費用にあてる。

8 研究発表

研究発表は、年会での発表、新人セミナーでの発表、紀要での発表を主とする。

9 会費振込口座

きらぼし銀行（旧・東京都民銀行）新宿支店 普通4051462 日本多読学会とする。

附則 本細則は、2017年6月3日に多読学会役員会にて改訂され、2018年4月1日より施行する。

補足：年会費は、消費税の課税対象外。

補足：東京都民銀行は、合併により、きらぼし銀行に改称されました。銀行コード、支店コードは従来のままです。

日本多読学会役員名

第14期役員名簿（2018年4月～2019年3月）

会長	竹田 恒美	東京工業高等専門学校
副会長	岡山 陽子	文教大学（非）
副会長	高瀬 敦子	関西学院大学（非）
副会長	西澤 一	豊田工業高等専門学校
事務局長	神田 みなみ	千葉県立保健医療大学
監事	繁村 一義	株式会社樋口総合研究所
理事	魚住 香子	神戸国際大学
	大縄 道子	石巻専修大学
	鬼丸 晴美	明星中学校・高等学校
	川上 由紀	埼玉大学教育学部附属小学校（非）
	国重 徹	鹿屋体育大学
	高良 則子	沖縄県立芸術大学
	力石 歩	東京シューレ葛飾中学校
	新田 智紀	SEG
	古川 昭夫	SEG
	逸見 一志	STEPWORLD
	黛 道子	日本保健医療大学
	宮下 いづみ	Eunice English Tutorial

「日本多読学会紀要」投稿規定（2017年8月5日現在）

1. 本学会紀要は、「日本多読学会紀要」（JERA Bulletin）とする。本学会紀要は、語学教育における多読の実践や多読に必要な図書・環境に関わる研究及び報告を積極的に公表することにより、多読の発展に寄与しようとするものである。
2. 投稿原稿執筆者は、本学会会員とする（共同執筆者を含める）。ただし、編集委員会が特に依頼、または許可する場合はこの限りではない。
3. 使用言語は日本語または英語とする。
4. 投稿原稿は未発表のものに限る。学会における口頭発表等をまとめなおしたものは未発表とみなす。
5. 投稿原稿には倫理的な配慮（個人が特定される記述・写真等がないこと、公開に対する同意を本人・保護者等から得ていることなど）がなされていること。
6. 投稿原稿の種類は、1) 研究論文 (Research Paper)、2) 実践報告 (Practice Report)、3) 研究ノート (Research Note)、4) 私の多読指導 (2-Page Class Report)、5) 書評 (Review)、6) 多読用図書紹介 (Books for Extensive Reading)、7) アイディア (Ideas)、8) 研究会等の報告 (Seminar / Workshop / Conference Report)、9) その他、があり、それぞれ以下の内容とする。
 - 1) 研究論文：多読による語学教育・語学学習に関する学術研究論文
 - 2) 実践報告：多読指導の実践に関する報告
 - 3) 研究ノート：多読に関する学術的研究の中間報告や速報、授業成果の問題提起
 - 4) 私の多読指導：多読指導の実践に関する簡易報告（規定書式あり）
 - 5) 書評：多読による語学教育・語学学習に関する専門書または論文の紹介および論評
 - 6) 多読用図書紹介：多読対象となるGR (graded readers)、LR (leveled readers)、児童書等の図書の紹介
 - 7) アイディア：多読や多読指導に関する実践的なアイディア、テクニック、教案
 - 8) 研究会等の報告：多読に関する研究会／ワークショップ／学会等の報告
 - 9) その他：編集委員会が特に認めたもの
7. 本学会紀要の発行は年1回とする。原則として発行は3月とし、投稿原稿締切日は10月末日とする。なお、ウェブ上での公開の際には、紀要に掲載済みのものを載せることを原則とする。
8. 投稿原稿の書式その他については以下のとおり。詳細に関しては、『「日本多読学会紀要」執筆要項」を別途定め、投稿希望者にメールにて送付する。
 - (1) 用紙 投稿原稿はA4に、MS Wordで作成する。
 - (2) レイアウト A4原稿の上下に30mm、左右に20mmの余白をとり、英語原稿の設定は1行76文字、縦38行、日本語原稿も横書きとし、設定は1行42文字、縦36行を基本とする。

文字のフォントとサイズについては、英語は Times New Roman 11ポイント、日本語は明朝体11ポイントを基準とする。

「私の多読指導」については、規定の書式を用いることとし、字体は日本語は明朝体、英語はTimes New Romanとする。フォントは、テーマ、指導者名、学校名、レッスン名、所在地、使用言語は、日本語、英語とも10ポイント、その他部分は日本語、英語とも9ポイントとし、文字数56（字送り8.5ポイント）、行数54（行送り12.4ポイント）に設定して所定の用紙に配置する。

- (3) 構成 タイトル（英語および日本語）、氏名（日本語の場合、英語も）、所属機関を記載する。研究論文には英語（300語程度）および日本語（400字程度）の要旨を、実践報告・研究ノートには要旨（日本語原稿の場合は英語、英語原稿の場合は日本語）を最初につけ、続けてキーワード（5つ以内）、本文、その他（注、参考文献、付録）の順とする。なお注には、脚注および文末脚注機能を使用しない。グラフ・図表・数表・写真等（全てモノクロ [白黒]）は原稿内にレイアウトし、同時に別ファイルでも提出する。
- (4) 図版・写真 図版、写真などを掲載する場合は、執筆者の責任において、あらかじめ著作権者から許諾を受けるものとする。

9. 投稿原稿の長さは、研究論文はA4判用紙20ページ程度、実践報告は2～16ページ程度、研究ノートは2～6ページ程度、書評は1～6ページ程度、多読用図書紹介は1～4ページ程度、アイデアは1ページ程度、研究会等の報告は4ページ程度とする。

10. 投稿原稿は、投稿原稿締切日までに投稿チェックシートとともに本学会紀要編集委員会宛に電子メールにファイルを添付して送付する。メールの本文には、原稿の種類、タイトル、氏名、連絡先（郵便番号、住所、電話番号、ファックス番号、電子メールアドレス）を記すこと。ただし、原稿種別についての最終判断は、掲載の際に編集委員会で行う。

11. 原稿提出先（および投稿希望申し込み先メールアドレス）は、以下の通り。

〒160-0023 新宿区西新宿7-19-19 SEG内 『日本多読学会紀要』編集委員会
電子メールアドレス: jerabulletinchiefeditors@gmail.com

12. 編集委員会は、投稿原稿の掲載の可否について判断する。掲載決定後、書式や体裁について編集委員会より執筆者に修正を求めたり、編集委員会の判断で書式の細部を変更したりすることがある。

13. 原稿料は支払わない。掲載となった執筆者には、掲載号5部を進呈する。抜刷は印刷しない。

14. 本学会紀要に掲載された研究論文等の著作権は本学会に帰属するものとし、これを学会がウェブ上で公開することに執筆者が同意したものとみなす。転載を希望する場合は、本学会にその旨を伝えること。

編集後記

日本多読学会紀要第12巻をお届けします。

本巻では、夏の年会の講演内容について高山芳樹先生からご寄稿いただきました。先生が監修者として関わられたNHKラジオ「エンジョイ・シンプル・イングリッシュ」制作の舞台裏についての大変興味深く貴重なお話を、年会に参加できなかった学会員の方にもお届けすることができ、大変嬉しく思います。

また多読学会年会、関西、九州、児童部会の各セミナーの報告もお寄せいただきました。執筆者の皆様にお礼を申し上げます。

本巻には2編の研究論文の投稿があり、そのうち1編が掲載されました。多読学会の原稿審査では、投稿された原稿はすべて、執筆者の名前を伏せ、編集委員会よりそれぞれ3名の査読者に依頼して、厳正な審査を行っております。査読の結果は、査読者からの詳細なコメントと共に執筆者にお伝えし、修正を重ねていただいています。ときには厳しい指摘もありますが、原稿をより良いものにしていただきたいという編集委員の熱い思いによるもので、投稿者の方には必ず役に立てていただけるものと自負しております。

多読学会紀要では、さまざまなバックグラウンドを持つ先生方から成りたっている本学会の強みでもある特徴を反映して、他学会では見ないほど多くの投稿カテゴリーを用意しております。どうぞ奮ってご投稿ください。本紀要が会員の皆様のさまざまな多読指導の知見をシェアする場となればと願っております。

なお、本巻の編集は、委員長以下、以下のメンバーによって行われました。

副編集委員長：高橋愛、高良則子、藤井数馬

編集委員：魚住香子、大槻きょう子、岡山陽子、国重徹、高瀬敦子、竹田恒美、
古川昭夫、黛道子、吉澤清美

編集・デザイン：katadol (<http://katadol.tokyo/>)

紀要編集委員会 委員長
大縄 道子

日本多読学会紀要 第12巻

2019年3月31日発行

発行：日本多読学会

〒160-0023 東京都新宿区西新宿 7-19-19 SEG 内

e-mail: jerabulletinchiefeditors@gmail.com

ホームページ <http://jera-tadoku.jp/>

編集・印刷：katadol (<http://katadol.tokyo/>)